

横須賀城
學術調査研究報告書

平成2年3月

大須賀町教育委員会

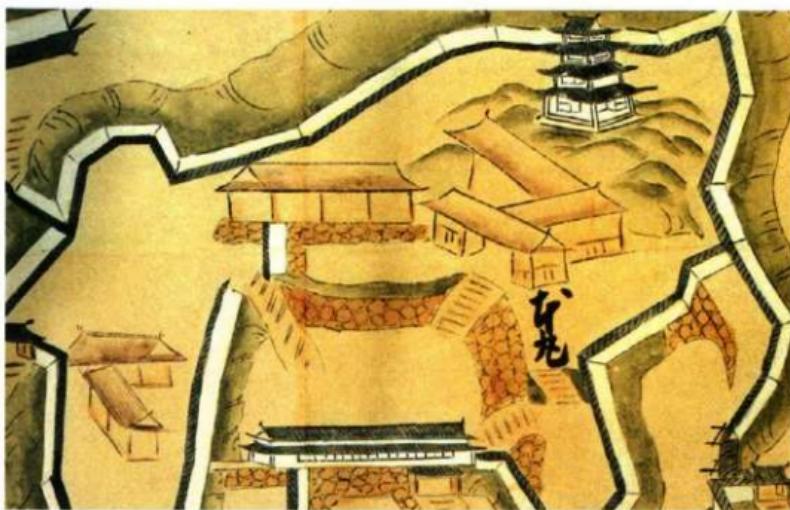
横須賀城
學術調査研究報告書

平成2年3月

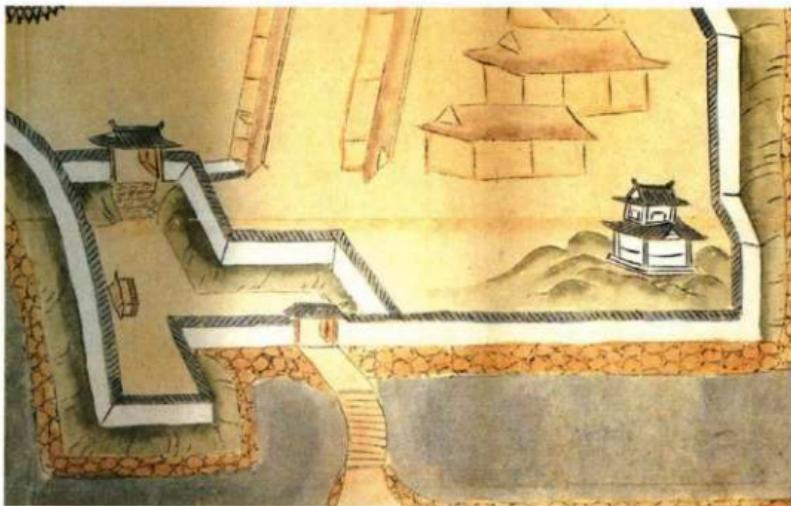
大須賀町教育委員会



〔図絵1〕横須賀城天守復元透視図



〔図絵2〕国会図書館蔵「遠州横須賀城図」本丸部分拡大



〔図絵3〕国会図書館蔵「遠州横須賀城図」東大手門部分

目 次

| | |
|---------------|----|
| 刊行にあたって | 5 |
| 図版・図表・付図リスト | 9 |
| 第1章 序論 | 13 |
| 1-1 日本史上の横須賀城 | 13 |
| 1-2 従来の研究 | 17 |
| 1-3 研究の視座 | 19 |
| 第2章 横須賀城の史料 | 21 |
| 2-1 絵図類 | 21 |
| (1) 横須賀城内郭図 | 21 |
| (2) 横須賀城兵学図 | 24 |
| (3) 横須賀城城下町図 | 27 |
| (4) 横須賀城街道図 | 31 |
| (5) 横須賀城その他絵図 | 32 |
| 2-2 文献類 | 33 |
| (1) 伝記類 | 33 |
| (2) 記録類 | 34 |
| (3) 編纂史料類 | 35 |
| (4) 地誌類 | 35 |

| | |
|-----------------|-----|
| 第3章 横須賀城の歴史 | 51 |
| 3-1 第I期 | 51 |
| 3-2 第II期 | 52 |
| 3-3 第III期 | 53 |
| 3-4 第IV期 | 54 |
| 3-5 第V期 | 54 |
| 第4章 横須賀城の建築 | 57 |
| 4-1 横須賀城史料の検討 | 59 |
| 4-2 正保城絵図仕様との関連 | 61 |
| 4-3 内郭建築の種類 | 67 |
| 4-4 天守 | 73 |
| (1) 天守台の規模・型式 | 75 |
| (2) 天守の平面 | 75 |
| (3) 天守の外観 | 76 |
| (4) 天守の高さ関係寸法 | 88 |
| (5) その他細部仕様 | 91 |
| 4-5 東大手枡形高麗門 | 92 |
| 付図 | 93 |
| あとがき | 109 |

図絵・図表・付図リスト

| | |
|-----------------------|---|
| 〔図1〕 横須賀城天守復元図 | 1 |
| 〔図2〕 横須賀城内郭図第I類： | |
| 国会図書館蔵「遠州横須賀城図」本丸部分 | 3 |
| 〔図3〕 横須賀城内郭図第II類： | |
| 国会図書館蔵「遠州横須賀城図」東大手門部分 | 3 |

第1章 序論

| | |
|-----------------|----|
| 〔図1-1〕 郭の繩張模式図 | 15 |
| 〔図1-2〕 天守の繩張模式図 | 15 |

第2章 横須賀城の史料

| | |
|------------------------------------|----|
| 〔表2-1〕 横須賀城内郭図 | 24 |
| 〔表2-2〕 横須賀城兵学図 | 26 |
| 〔表2-3〕 横須賀城城下町図 | 30 |
| 〔表2-4〕 横須賀城街道図 | 31 |
| 〔表2-5〕 横須賀城その他絵図 | 32 |
| 〔図2-1〕 横須賀城内郭図第I類：国会図書館蔵「遠州横須賀城図」 | 36 |
| 〔図2-2〕 横須賀城内郭図第II類：国会図書館蔵「遠州横須賀城図」 | 37 |
| 〔図2-3〕 横須賀城内郭図第III類：天理図書館蔵「遠州横須加」 | 38 |
| 〔図2-4〕 横須賀城内郭図第IV類：国会図書館蔵「横須賀城古図」 | 39 |

| | |
|--------------------------------------|----|
| 〔図 2-5〕 横須賀城内郭図第V類： | |
| 大須賀町教育委員会蔵「横須賀城分間絵図」 | 40 |
| 〔図 2-6〕 横須賀城内郭図第V類：国会図書館蔵「横須賀城」 | 41 |
| 〔図 2-7〕 横須賀城内郭図第V類：国会図書館蔵「横須賀城」部分 | 42 |
| 〔図 2-8〕 横須賀城兵学図第I類：京都大学蔵「遠江横須加」 | 43 |
| 〔図 2-9〕 横須賀城兵学図第II類：尊經閣文庫蔵「遠州横須賀略図」 | 44 |
| 〔図 2-10〕 横須賀城兵学図第III類：蓬左文庫蔵「遠州横須賀城図」 | 45 |
| 〔図 2-11〕 横須賀城城下町図第I類： | |
| 阿部俊夫氏蔵「横須賀城井家中絵図」 | 46 |
| 〔図 2-12〕 横須賀城城下町図第II類： | |
| 大須賀町撰要寺蔵「遠州横須賀惣絵図」 | 47 |
| 〔図 2-13〕 横須賀城城下町図第III類： | |
| 大須賀町教育委員会蔵「横須賀城下古図」部分 | 48 |
| 〔図 2-14〕 横須賀城城下町図第IV類： | |
| 東京大学史料編纂所蔵「遠江国横須賀」 | 49 |
| 〔図 2-15〕 横須賀城街道図第II類：蓬左文庫蔵「横須賀城」 | 50 |

第3章 横須賀城の歴史

| | |
|--------------------|----|
| 〔表 3-1〕 横須賀城歴代城主一覧 | 55 |
| 〔図 3-1〕 横須賀城繩張変遷模式 | 56 |

第4章 横須賀城の建築

| | |
|-------------------------------------|----|
| 〔表 4-1〕 江戸時代初期（1650頃）における諸城下町住区別面積 | 59 |
| 〔表 4-2〕 3層層塔型天守・櫓規模比較 | 77 |
| 〔表 4-3〕 3層層塔型天守・櫓側柱筋軒高・階高と桁行長・梁間長比較 | 81 |
| 〔表 4-4〕 3層層塔型天守・櫓の遙減率比較 | 82 |

| | |
|---|----|
| 〔図 4－1〕 国立公文書館内閣文庫蔵「安芸国広島城所絵図」 | 63 |
| 〔図 4－2〕 国立公文書館内閣文庫蔵「相模国小田原城絵図」部分 | 63 |
| 〔図 4－3〕 平成 2 年 3 月天守台跡発掘調査南側根石部分 | 74 |
| 〔図 4－4〕 旧見付学校校舎石垣（明治 8 年） | 74 |
| 〔図 4－5〕 弘前城天守外観 | 79 |
| 〔図 4－6〕 福山城伏見櫓外観 | 79 |
| 〔図 4－7〕 3 層層塔型天守・櫓側柱筋軒高比較 | 84 |
| 〔図 4－8〕 3 層層塔型天守・櫓側柱筋階高比較 | 86 |
| 〔図 4－9〕 恩高寺蔵伝横須賀城天守駄 （上）・鬼瓦（下右）・軒丸瓦・菊丸（下左） | 90 |
| 〔図 4－10〕 旧普門寺山門 | 91 |

付 図

| | |
|---------------------------|-----|
| 1. 横須賀城天守台復元配置図 | 93 |
| 2. 横須賀城天守台復元断面図 | 95 |
| 3. 横須賀城天守復元一階平面図 | 97 |
| 4. 横須賀城天守復元中二階平面図 | 98 |
| 5. 横須賀城天守復元二階平面図 | 99 |
| 6. 横須賀城天守復元三階平面図 | 100 |
| 7. 横須賀城天守復元大屋根伏図 | 101 |
| 8. 横須賀城天守復元西立面図 | 102 |
| 9. 横須賀城天守復元南立面図 | 103 |
| 10. 横須賀城天守復元東立面図 | 104 |
| 11. 横須賀城天守復元東西断面図 | 105 |
| 12. 横須賀城天守復元南北断面図 | 106 |
| 13. 横須賀城東大手枠形高麗門復元平面図・断面図 | 107 |
| 14. 横須賀城東大手枠形高麗門復元正面図・側面図 | 108 |

第1章 序論

1—1 日本史上の横須賀城

約3世紀におよんで近世日本を支配した江戸政権において、その端緒となる徳川家康東方進出の重要な拠点として、横須賀城は日本史上にその名を留める。当初予定していた高天神城を武田方に明け渡さざるを得なくなつた家康は、ただちにそのおさえとして横須賀城の築城を考えている。しかもそれまでの中世的山城の様態をもつてゐた高天神城に対して、平山城である横須賀城を選択、交通・運輸・経済等を総合的に勘案し、繩張=築城（都市計画）という近世城下町形成の先鞭をつけたのである。

この家康の築城計画に対する考え方が、以後一連の徳川幕府による都市政策の根本理念ともなり、織田信長に始まる安土・桃山時代の城と城下町に関する構成を、江戸時代のそれへと昇華させた意味で、横須賀城の歴史的意義は極めて大きい。そしてそれが、駿府城・名古屋城等の天下普請による大築城計画へと発展してゆくわけで、横須賀城は、単なる地方都市の城郭である以上に近世都市計画技術の原点として、重要性をもつてゐる。

そこで、次に横須賀城の形態的特質を以下に概説する。

郭の繩張

日本近世城下町計画を全望する時、城郭の構成を定める本丸・二丸・三丸・西丸等の諸郭（曲輪）の繩張類型には、歴史上次の4つの存在が知られている。

① 梯郭式——本丸を高地の核として、二丸・三丸等を順次その外辺に偏

心すなわち「梯（段階）」状の段下がりに配する縄張（例：名古屋城・岡山城・萩城・鳥取城・府内城等）

② 連郭式——本丸・二丸・三丸等をほぼ同標高でそれぞれ独自性をもたせて相互に直列する縄張（例：水戸城・諏訪高島城・岸和田城等）

③ 環郭式——本丸高台を中心に、その四周を囲繞する様態で二丸・三丸等を構成する縄張（例：大坂城・駿府城・広島城・田中城等）

④ 渦郭式——本丸を高地の核として、二丸・三丸等を周辺低地へ渦巻状螺旋型に配する縄張（例：江戸城・金沢城等）

以上の内郭縄張の4類型は、付記したような典型例も少なくないが、一般的には、それらの複合型が多く、「連郭+梯郭」式（例：伏見城）、「連郭+環郭」式（例：二条城）、「梯郭+渦郭」式（例：熊本城）、「渦郭+環郭」式（例：丸亀城）…がある。

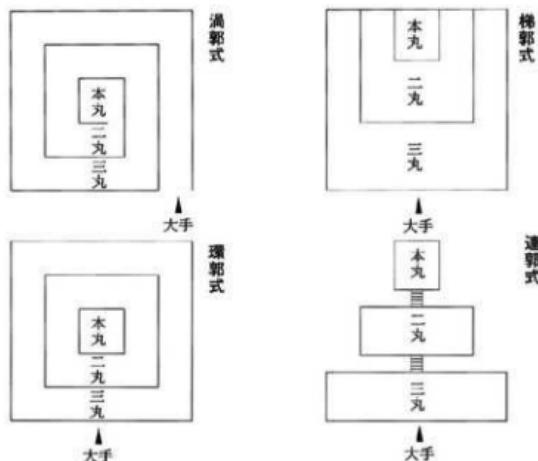
横須賀城においては、幾度もの縄張の改変があり、築城当初は単純な「梯郭」式の縄張をもっていたが、築城第III期（第3章参照）に至って「梯郭+連郭」式の縄張へと変化し、近世城郭としての特色を新たにしている。

天守の縄張

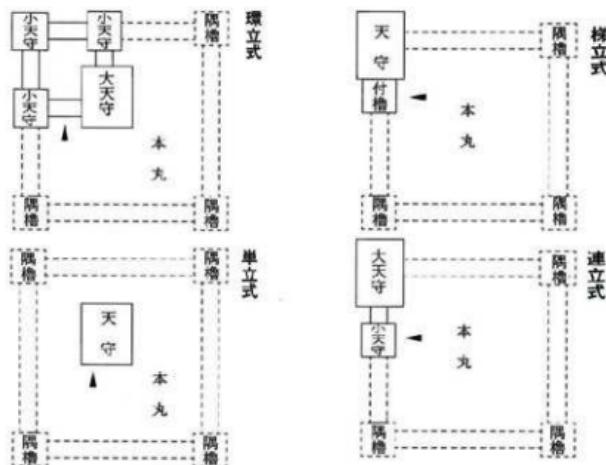
横須賀城の変遷過程には、次章で述べるように第I期～第V期がある。特に、その形態は史料によって必ずしも一定していない。具体的には第4章で考察するが、ここではまず天守自体の縄張についての4類型を述べる。

① 梯立式——初期の天守には、未熟な石垣構築技術のためもあって、天然の地山地形に準じた不整形な天守台を造成した結果、あたかも天守の階梯（ハシゴ）となるような付櫓が添え加わる形式。例：安土城、天正度（秀吉造営）大坂城、肥前名護屋城、広島城、岡山城

② 連結式——初期の梯立式の付櫓が独立して1ないし2基の小天守・隅櫓となり、大天守と機能的に連結しながらそびえ立つ形式。天守台平面はほぼ矩形（ただし未だ亞はある）となり、渡櫓や櫓台で小天守・隅櫓と接続す



〔図1－1〕郭の縄張模式図



〔図1－2〕天守の縄張模式図

る。1軸方向に連なる例には熊本城・名古屋城、2軸方向の例には松本城がある。

③ 環立式——上記連立式が極限に達したもので、小天守・隅櫓を一周して環状に連ねた形式。一般には四角形に繩張される（例：姫路城・伊予松山城等）が、多角形になる場合（例：高山城・和歌山城等）もある。大天守・小天守・隅櫓が環立する形態は、あたかも本丸内に独立して2重の郭を形成する機能を示すので、特に「天守丸」と称される例もある。

④ 単立式——大坂陣で豊臣家滅亡によるいわゆる元和偃武以後、天守は「一城の飾り」と化し、環立式の繩張は本丸御殿との連絡上、その必要性がなくなり、本丸最深部に塔状の天守一基のみをたてる形式。その登閣御門口に、例えば小天守台が設けられても、それは名目で、実際には天守のみが単立するに過ぎなくなる。太平の江戸時代天守のほとんどは、この形式である。（例：元和・寛永度江戸城、寛永度二条城、寛永度大坂城、宇和島城、丸亀城等）

以上の天守自体の繩張変遷過程にあって、横須賀城は天守一基が独立して屹立するという形態をもち、とりあえず単立式に分類される。

天守の様式

天守は、織田信長が安土城において天守の「天主」たる破天荒な造形を行って以来、城下町のランドマークとして衆目を集め建築である以上に、政治的ないしは宗教的役割を果していた。それがやがて安土・桃山・江戸時代を通じて一般化し、その建築様式は、大局的に、「望楼型」から「層塔型」へと発展する。望楼型は、一般的に1～2層の橹の上に単層の望楼を乗せる構造をもち、下層の橹部分と上層の望楼部分とが造形上の整合性にとばしく、天守様式の草創期の特色として認められている。他方、層塔型は、下層から上層にいたるまで、天守全体の造形上の整合性ひいては統一性が著しく、あたかも5重（層）塔のごとき外容を整えて、天守様式の完成期の特色として

理解されている。

そしてその両様式を時代的に細分すれば、それぞれ前期から後期への発展過程がある。具体的には、まず前期望楼型が信長の天正4年（1576）安土築城以降およそ慶長5年（1600）の関ヶ原役まで、ついで慶長20年（1615）の大坂夏の陣までの間で後期望楼型から前期層塔型への発展があり、最後に大坂陣後の元和・寛永の江戸時代初期で、後期層塔型の様式的熟成をみる。

それ以後は、本質的に天守様式に変化はなく、時として望楼風の天守が建立されることはあっても、その内実は層塔型の構造をもつのが一般で、復古型と判断されている。

以上の天守様式の発展過程を様式が判明する代表例で示せば、次のごとくになる。

- ① 前期望楼型天守——安土城・天正度大坂城・聚楽城（第）・肥前名護屋城・広島城・岡山城・松本城（改造）
- ② 後期望楼型天守——慶長度二条城・慶長度伏見城・熊本城・萩城・彦根城・松江城
- ③ 前期層塔型天守——龜山城・小倉城・津山城・名古屋城
- ④ 後期層塔型天守——元和度江戸城・寛永度二条城・寛永度大坂城・寛永度江戸城
- ⑤ 復古型天守——犬山城・和歌山城・高知城・松山城

横須賀城の天守は、単立式の繩張に加えて、上記にいう層塔型であることが判明している。詳細は第4章で分析するが、江戸時代天守の典型的様式としての単立式であるが、さらに雪打（差掛けなわち蓑階）を付して、一見4層にみえる個性的表現を加えている。

1-2 従来の研究

明治2年6月の版籍奉還で明治新政府に移管された横須賀城は、その後駿遠の城を廢城とするその方針によってしばらく放置されていたが、明治6年城の払い下げ令が通達されている。そして天守等の建物はおろか、石垣の類までもが多所に分散し、さらには天守跡地に忠靈殿が第2次大戦後に建立されるなどして、現状からは、かつての面影をしのぶことがむづかしい。

現在までの横須賀城研究も、横須賀城下町ひいては大須賀町の景観形成において、城が歴史上重要な役割を果しているにもかかわらず、概して一般史ないしは考古学的考察に属しており、城郭特に天守等の具体的建築様式に関するものは少ない。主な研究としては以下のものが挙げられる。

- ① 『大須賀町誌』 大正4年 大須賀町誌編纂委員会編
- ② 『横須賀城史談』 昭和42年 藤田清五郎 著
- ③ 『遠州国横須賀城址石垣と堀の一部調査報告書』 昭和49年 栗田有城
他編
- ④ 『遠江国横須賀城址調査報告書』 昭和49年 安本 博 編
- ⑤ 「横須賀城」 昭和54年 新人物往来社刊『日本城郭大系9』 所収
- ⑥ 「横須賀城」 昭和55年 大須賀町誌編纂委員会編『大須賀町誌』 所収
- ⑦ 「横須賀城」 昭和56年 静岡県教育委員会編『静岡県文化財調査報告書第23集—静岡県の中世城館跡』 所収
- ⑧ 『史跡横須賀城跡 保存管理計画策定報告書』 昭和59年 大須賀町教育委員会刊
- ⑨ 『史跡横須賀城跡I 昭和59年度保存修理事業概報』 昭和60年 大須賀町教育委員会刊
- ⑩ 『史跡・横須賀城跡 復原と環境整備のための基本計画』 昭和60年 大須賀町教育委員会刊

- ⑪ 「史跡横須賀城跡II 昭和60年度保存修理事業概報」 昭和61年 大須
賀町教育委員会刊
- ⑫ 「史跡横須賀城跡III 昭和61年度保存修理事業概報」 昭和62年 大須
賀町教育委員会刊
- ⑬ 「史跡横須賀城跡IV 昭和62年度保存修理事業概報」 昭和63年 大須
賀町教育委員会刊

1—3 研究の視座

前節で先学の横須賀城に関する諸論文を挙げたが、城郭自体の建築史・都市史上からの本格的研究は未だなされていないのが実情である。先述したように、横須賀城が近世城郭史上に及ぼした影響の大きさを考えれば、さらに多面的研究がなされていてしかるべきで、今まで研究対象として看過されてきたのは、その価値を未だ見いだすに至っていないかった為と考えられる。

そこで本報告では、従前の研究・諸調査等の業績をふまえた上で、改めて横須賀城に関する史料の全国的な集成をはかり、もってそれらの日本城郭史上の体系的技術分析を行う。特に、その系統的様式理解の成果を加え、横須賀城天守を可能なかぎりの具体性をもって復元的考察をおこない、その歴史的価値を論ずる。

第2章 横須賀城の史料

建築史・都市史、ないしは城郭史的視座より、横須賀城に関する史料を改めて全国的に採集すれば、絵図類39本、文献類13本が集成される。以下に編年の結果を前提にしてその概要を記す。

2-1 絵図類

横須賀城関係の絵図史料には、39本が知られる。これらの史料を「城郭図」・「城下町図」・「兵学図」・「街道図」・「その他」の5類に分類、次にその書誌を概説する。(編年期については第3章参照)

(1) 横須賀城内郭図 [表2-1]

本類に属する史料は、本丸・北丸・西丸・二丸・三丸のいわゆる内郭部分の絵図で、8本ある。ここでは、さらに記載内容などから5類に分けて概説する。

第1類

① 「遠州横須賀城図」(『日本古城絵図』第4 東海道之部〈3〉49所収)

国会図書館蔵 [図2-1]

84.6cm×131.6cm・紙本彩色 第III期

水を青、土手を緑、建物を茶、堀を白で彩色している。

いわゆる正保城絵図仕様における内郭部分のみを詳細にした形式で、本丸には単立式層塔型4層の天守が描かれている他、隅櫓や門、郭内の諸建

物が示されており、史料的に極めて貴重である。

- ② 「遠州横須賀城図」(『日本分国絵図』第11帙第42舗所収) 内閣文庫蔵
54.4cm×93.6cm・紙本彩色 第III期

前述国会図書館蔵の「遠州横須賀城図」と似た描写域・描写内容をもつが、本図の方が記入事項で詳細を極める。本丸には単立式層塔型4層天守がみられる。

- ③ 「遠江国横須賀城図」(『五畿七道城図』所収) 福井県立図書館蔵
77.6cm×126.4cm・紙本彩色 第III期

横須賀城の内郭を中心に描いており、大局的には①②図と同系統であるが、本丸には単立式層塔型5層の天守がみられるなど建築描写に特異さが目立つ。

第II類

- ④ 「遠州横須賀城図」(『日本古城絵図』第4 東海道之部〈3〉48所収)
国会図書館蔵 [図2-2]

54.9cm×121.8cm・紙本彩色 第III期

土手・石垣・堀などが、緑・灰・青で塗り分けられている。単立式層塔型3層の天守や櫓が描かれている他、門には柱位置が示され、その形式を確認できる。また井戸の位置も示されている。

- ⑤ 「遠州横須賀城図」 静嘉堂文庫蔵

29.6cm×50.2cm・紙本彩色 第III期

堀・土手・石垣などが灰・茶・黄で塗り分けられている。

本丸に単立式層塔型3層天守がみられる他、3層の二丸・三丸隅櫓、井戸などが示され、絵図上部には「從江戸日本橋行程五拾八里」と書かれている。また城主代々(初代大須賀康高から13代西尾隱岐守忠成まで)の裏書がある。

第III類

- ⑥ 「遠州横須加」(『日本城図』所収) 天理図書館蔵 [図2-3]

28.5cm×37.7cm・紙本彩色 第III期

「天守四重」・「城代屋布」・「城主居所」・「二重矢倉」などの他、石垣の高さや幅の記載がある。なお天守は「四重」と記入されているが、単立式層塔型3層天守の絵が描かれている。

第IV類

⑦ 「横須賀城古図」(陸軍省築城部本部『日本城郭資料』第17冊遠江国所収)

国会図書館蔵 [図2-4]

26.0cm×40.0cm・紙本彩色 第IV期

色鉛筆での彩色がなされている。単立式層塔型3層天守の他、太鼓櫓・二階門・米倉・御殿・長屋などの位置が記入されており、二丸御殿における台所と大広間の場所も明示されている。図法からして上記第II類を原本とし、幕末の様態(明治6年入札前)を伝えたものと思われる。

第V類

⑧ 「横須賀城分間絵図」 大須賀町教育委員会蔵 [図2-5]

81.6cm×157.2cm・紙本彩色 第V期

「明治五年四月量図之」との記載があり、廃城直後の横須賀城内郭の測量図である。

第V類

⑨ 「横須賀城」(陸軍省築城部本部『日本城郭資料』第17冊遠州国所収) 国会図書館蔵 [図2-6・7]

37.0cm×66.2cm・紙本彩色 第V期

野線紙を貼り合わせた紙に書かれており、水堀を青、空堀を茶の色鉛筆で彩色している。

昭和13年調査の記録であり、1/1000の実測図に近い性格をもつ。本丸は特に詳細に描かれ、天守台の寸法及び高低差の記入があって本丸・天守を考察する上で大変貴重な史料といえよう。また北丸の乾堀(空堀)についての断面図も付されている。

〔表2-1〕横須賀城内郭図

| 絵図名 | 類 | 所蔵 | 縦cm | 横cm | 時代 | 備考 |
|--------------|-----|------------|------|-------|-----|--|
| ① 「遠州横須賀城圖」 | I | 国会図書館 | 84.6 | 131.6 | III | 彩色書絵図 『日本古城絵図』 第4帙東海道之部(349)の内 |
| ② 「遠州横須賀城圖」 | I | 国立公文書館内閣文庫 | 54.4 | 93.6 | III | 彩色書絵図 『日本分国絵図』 第11帙第42鋪の内 |
| ③ 「遠江国横須賀城圖」 | I | 福井県立図書館 | 77.6 | 126.4 | III | 彩色書絵図 |
| ④ 「遠州横須賀城圖」 | II | 国会図書館 | 54.9 | 121.8 | III | 彩色書絵図 『日本古城絵図』 第4帙東海道之部(348)の内 |
| ⑤ 「遠州横須賀城圖」 | II | 静嘉堂文庫 | 29.6 | 50.2 | III | 彩色書絵図 城主代々「初代 大須賀康高-13代 西尾忠成」の裏書 |
| ⑥ 「遠州横須加」 | III | 天理図書館 | 28.5 | 37.7 | III | 彩色書絵図 『日本城図』の内 「天守四重」他の付記 |
| ⑦ 「横須賀城古図」 | IV | 国会図書館 | 26.0 | 40.0 | IV | 彩色書絵図(鉛筆) 陸軍省築城部本部『日本城郭資料』第17冊 遠江国 |
| ⑧ 「横須賀城分間絵図」 | V | 大須賀町教育委員会 | 81.6 | 157.2 | V | 彩色書絵図 「明治5年4月量図之」の付記 |
| ⑨ 「横須賀城」 | V | 国会図書館 | 37.0 | 66.2 | V | 彩色書絵図(鉛筆) 陸軍省築城部本部『日本城郭資料』第17冊 遠江国 昭和13年調査記録 |

注：時代欄は第3章による。

(2) 横須賀城兵学図 〔表2-2〕

本類に属する史料は、いわゆる兵学演習用に記された繩張の略図で、13本が認められる。ここでは、さらに記載内容などから4類に分けて以下に概説する。

なお、同一内容の図が多本認められる場合は、代表的な良質本を示すに留め、他は省略している。

第I類

- ① 「遠州国横須賀」(「分国城図」所収) 静岡県立中央図書館蔵

27.0cm×45.2cm・紙本彩色 第III期

水・田・山・土手・道などを、青・緑・黄で塗り分けている。内郭を模式化して描いており、単立式層塔型3層天守がみられる。

- ② 「遠州横須加」(『主國合結記』所収) 蓬左文庫蔵

29.5cm×21.0cm・紙本彩色 第III期

前述「遠州国横須賀」と酷似した史料である。

- ③ 「遠江横須加」(『日本城図』所収) 京都大学蔵 [図2-8]

28.2cm×42.2cm・紙本彩色 第III期

前述2史料と酷似した史料である。

- ④ 「西尾隱岐守殿遠江横須賀」(『諸国城之図』所収) 国会図書館蔵

15.0cm×27.4cm・紙本彩色 第III~IV期

前述諸史料と同内容であるが、少々写実的に示されている。

- ⑤ 「遠江横須賀城」(『主國合結記』所収) 東京国立博物館蔵

26.6cm×36.2cm・紙本彩色 第III期

堀・道・堀・土手などが、青・黄・黒・緑で塗られ、前述諸史料を簡略化して記したものである。

- ⑥ 「遠江国横須賀」(『主國合結記』所収) 静嘉堂文庫蔵

26.5cm×35.9cm・紙本彩色 第III期

前述諸史料と同内容であり、水・土手・堀・道・石垣などが、青・緑・赤・黄・灰で描かれている。また、単立式層塔型2層天守が描かれているが、模式的である。

第二類

- ⑦ 「遠州横須賀略図」(『諸国居城之図集』所収) 金沢市立図書館蔵

28.3cm×41.5cm・紙本彩色 第III期

石垣・水・山・田・空堀などが、黄・青・緑・茶で描かれている。前述①~⑤までの諸史料をさらに略化したもので、天守の描写はなく、天守台位置が黒く塗られているだけである。

- ⑧ 「遠州横須賀西尾隱岐守忠善」(『日本諸城之図』所収) 静嘉堂文庫蔵

26.6cm×35.2cm・紙本彩色 第III～IV期

前図と酷似するが、さらに多くの色が使われている。

- ⑨ 「遠州横須賀略図」(『五畿七道城図』所収) 尊経閣文庫蔵

28.9cm×41.1cm・紙本彩色 第III期 [図2-9]

前述図と酷似するが、郭外の山や田畠等が詳細に描かれている。

- ⑩ 「遠州横須賀略図」(『諸国居城井城主記』所収) 尊経閣文庫蔵

28.9cm×40.5cm・紙本彩色 第III期

前述③の史料と酷似し、史料法量もほぼ同じである。

(表2-2) 横須賀城兵学図

(同一内容は、良質本に限り他は省略)

| 繪 図 名 | 類 | 所 �藏 | 縦cm | 横cm | 時代 | 備 考 |
|------------------|-----|-----------|------|------|--------|--------------------|
| ① 「遠江国横須賀」 | I | 静岡県立中央図書館 | 27.0 | 45.2 | III | 彩色書絵図 『分国城図』の内 |
| ② 「遠州横須加」 | I | 蓬左文庫 | 29.5 | 21.0 | III | 彩色書絵図 『主因合結記』の内 |
| ③ 「遠江横須加」 | I | 京都大学 | 28.2 | 42.2 | III | 彩色書絵図 『日本城図』の内 |
| ④ 「西尾尾岐守殿遠江横須賀」 | I | 国会図書館 | 15.0 | 27.4 | III～VI | 彩色書絵図 『諸国城之図』の内 |
| ⑤ 「遠江横須賀城」 | I | 東京国立博物館 | 26.6 | 36.2 | III | 彩色書絵図 『主因合結記』の内 |
| ⑥ 「遠江国横須賀」 | I | 静嘉堂文庫 | 26.5 | 35.9 | III | 彩色書絵図 『主因合結記』の内 |
| ⑦ 「遠州横須賀略図」 | II | 金沢市立図書館 | 28.3 | 41.5 | III | 彩色書絵図 『諸国居城之図集』の内 |
| ⑧ 「遠州横須賀西尾尾岐守忠善」 | II | 静嘉堂文庫 | 26.6 | 35.2 | III～VI | 彩色書絵図 『日本諸城之図』の内 |
| ⑨ 「遠州横須賀略図」 | II | 尊経閣文庫 | 28.9 | 41.1 | III | 彩色書絵図 『五畿七道城図』の内 |
| ⑩ 「遠州横須賀略図」 | II | 尊経閣文庫 | 28.9 | 40.5 | III | 彩色書絵図 『諸国居城井城主記』の内 |
| ⑪ 「遠州横須賀城図」 | II | 岩瀬文庫 | 40.0 | 57.0 | III | 彩色書絵図 『城廓図』の内 |
| ⑫ 「遠州横須賀城図」 | III | 蓬左文庫 | 37.5 | 54.0 | IV | 彩色書絵図 『享保元丙中曆』の付記 |

注：時代欄は第3章の区分による。

⑪ 「遠州横須賀城図」(「城廬図」所収) 岩瀬文庫蔵

40.0cm×57.0cm・紙本彩色 第III期

第III類

⑫ 「遠州横須賀城図」 蓬左文庫蔵 [図2-10]

37.5cm×54.0cm・紙本彩色 第IV期

山・堀・屋敷などを、灰・緑・薄緑・黄で表わしている。繩張は模式的に描かれているが、その広さを示していく貴重である。また「享保元丙申曆」の年紀がある。

(3) 横須賀城城下町図 [表2-3]

本類に属する史料は、以上にみてきた城郭図とは異なり城下町全域を中心として記したもので、16本が属する。ここではさらに記載内容などから4類に分けて概説する。

第I類

① 「正保年間横須賀城下之図」 大須賀町撰要寺蔵

80.2cm×165.4cm・紙本彩色 第III期

水・道・建物・山などが、青・灰・紺・緑等で描かれている。

阿部俊夫氏所蔵・昭和7年写の裏書きがある。題名からして原図はいわゆる正保城絵図と称して、幕府が調査した一連の城下町図仕様に従うものと考えられ、単立式4層天守等城郭内建築が描かれて重要な史料である。内郭図第I類との関連が認められる。

② 「正徳年間横須賀城下之図」 大須賀町教育委員会蔵

76.5cm×163.0cm・紙本彩色 第III期

水・町屋・山などが青・灰・緑で描かれ、4層天守がみられる。大正12年の写で、「本図ハ正保年間ノ原図ニ依リ正徳年間西尾家之中之屋敷ヲ転入シタルモノアルベシ」の添書きがある。

③ 「横須賀御城及御城下図」 大須賀町教育委員会蔵

76.2cm×163.9cm・紙本彩色 第III期

木・山・田などが、青・緑・黄緑・灰・朱で描かれている。城下全体が詳しく描かれ、単立式層塔型4層天守がみられる。「正徳三年写、嘉永三年柴田清一郎宅家ヨリ 昭和三十九年四月 松永専三郎氏再写」の添書がある。

- ④ 「横須賀城并家中絵図」 阿部俊夫氏蔵 [図2-11]

79.8cm×166.2cm・紙本彩色 第III期

住宅・武家地を赤、水を青、下級武家屋敷を黄、山・土手を緑、屋根・寺社を茶などで彩色している。絵図左方に「正徳五年乙未年五月改寫 明治四十二年八月寫之 阿部俊馬」の添書がある。

- ⑤ 「横須賀城下之図」(『勅諭五十周年記念展覧会出版物城郭模写』所収)

静岡県立中央図書館蔵

76.8cm×173.8cm・紙本彩色 第III期

水・道・建物・山などが青・赤・黄・緑等で描かれている。裏書があり、「紀元二三七五年二百十四年前 正徳五乙未年五月改寫、嘉永七甲寅年四月再寫、十一月二十七日改元アリテ安政元年。大正拾年二月再復寫、本図ハ横須賀町役場所蔵ノ全町字今澤形山五平ノ写シタル 昭和四己巳年八月十八日復寫ス」と記されている。

第II類

- ⑥ 「遠州横須賀城下図」(陸軍省築城部本部『日本城郭資料』第17冊遠江国所収) 国会図書館蔵

23.5cm×30.8cm・紙本彩色 第III期

前述諸史料と類似するが、概して略図といえ、城下図でありながら先述兵学図的要素をもつ。

- ⑦ 「遠州横須賀」(『城絵図』所収) 東京国立博物館蔵

33.0cm×43.2cm・紙本彩色 第III期

水・道・町屋・寺・石垣・土手などが青・黄・赤・紫・灰・緑で描かれ

〔表2-3〕横須賀城城下町図

| | 絵図名 | 類 | 所蔵 | 縦cm | 横cm | 時代 | 備考 |
|---|---------------|-----|-------------|-------|-------|-----|--|
| ① | 「正保年間横須賀城下之図」 | I | 大須賀町撰要寺 | 80.2 | 165.4 | III | 彩色書絵図 阿部俊夫氏所蔵 昭和7年写 |
| ② | 「正徳年間横須賀城下之図」 | I | 大須賀町教育委員会 | 76.5 | 163.0 | III | 彩色書絵図 「本國ハ正保年間ノ原図ニ依リ正徳年間西尾家之モノ屋敷ヲ転入シタルモノナルベシ」の付記 大正12年写 |
| ③ | 「横須賀御城及御城下図」 | I | 大須賀町教育委員会 | 76.2 | 163.9 | III | 彩色書絵図 「正徳三年写、嘉永三年柴田清一郎宅家ヨリ昭和三十九年四月 松永専三郎氏再写」の付記 |
| ④ | 「横須賀城井家中絵図」 | I | 阿部俊夫氏 | 79.8 | 166.2 | III | 彩色書絵図 「正徳五乙未年五月改写 明治四十二年八月写之阿部俊馬」の付記 |
| ⑤ | 「横須賀城下之図」 | I | 静岡県立中央図書館 | 76.8 | 173.8 | III | 彩色書絵図 「勅論五十周年記念展览会出版物城郭圖模写」の内 「正徳五乙未年五月改写、嘉永七中寅年四月再写」大正拾年二月再復写「昭和四巳年八月十八日復写ス」の付記 |
| ⑥ | 「遠州横須賀城城下図」 | II | 国会図書館 | 23.5 | 30.8 | III | 彩色書絵図 (鉛筆) 陸軍省築城部本部『日本城郭資料』第17冊遠州国之内 |
| ⑦ | 「遠州横須賀」 | II | 東京国立博物館 | 33.0 | 43.2 | III | 彩色書絵図 「城絵図」の内 |
| ⑧ | 「横須賀」 | II | 広島市立図書館茂野文庫 | 27.7 | 40.2 | III | 彩色書絵図 「諸国当城之図」の内 |
| ⑨ | 「遠州横須賀惣絵図」 | II | 大須賀町撰要寺 | 92.3 | 187.5 | III | 彩色書絵図 中島栄太郎氏所蔵 昭和7年2月1日写 |
| ⑩ | 「横須賀城下古図一」 | III | 大須賀町教育委員会 | 171.4 | 117.8 | IV | 彩色書絵図 三巻の内一 (太田すみ氏寄贈) |
| ⑪ | 「横須賀城下古図二」 | III | 大須賀町教育委員会 | 172.4 | 88.6 | IV | 彩色書絵図 三巻の内二 (太田すみ氏寄贈) |
| ⑫ | 「横須賀城下古図三」 | III | 大須賀町教育委員会 | 131.3 | 88.8 | IV | 彩色書絵図 三巻の内三 (太田すみ氏寄贈) |
| ⑬ | 「横須賀城下図右1」 | III | 大須賀町教育委員会 | 149.7 | 90.1 | IV | 彩色書絵図 三巻の内一 |
| ⑭ | 「横須賀城下図右2」 | III | 大須賀町教育委員会 | 149.3 | 97.1 | IV | 彩色書絵図 三巻の内二 |
| ⑮ | 「横須賀城下図左3」 | III | 大須賀町教育委員会 | 149.9 | 90.2 | IV | 彩色書絵図 三巻の内三 |
| ⑯ | 「遠江国横須賀」 | IV | 東京大学史料編纂所 | 23.9 | 34.6 | IV | 彩色書絵図 「諸国城之図」の内 「延宝七年…」の付記 笠原恵氏原蔵 |

注：時代欄は第3章の区分による。

ている。

⑧ 「横須賀」(『諸国当城之図』所収) 広島市立図書館浅野文庫蔵

27.7cm×40.2cm・紙本彩色 第III期

前述諸史料と類似している。

⑨ 「遠州横須賀惣絵図」 大須賀町撰要寺蔵 [図2-12]

92.3cm×187.5cm・紙本彩色 第III期

水・山・道・城・などを、青・黒・茶・朱・灰等で表わしている。城下町の様子が大変詳しく示されているが、内郭部は「御城」とあるのみである。

第III類

⑩⑪⑫ 「横須賀城下古図」 大須賀町教育委員会蔵 [図2-13]

一. 171.4cm×117.8cm

二. 172.4cm×88.6cm

三. 131.3cm×88.8cm

紙本彩色・3枚組 第IV期

一枚の城下町図を切断して裏打したものである。

町屋・水・山などが、黄・茶・青・緑等を使って描かれている。

⑬⑭⑮ 「横須賀城下図」 大須賀町教育委員会蔵

一. 149.7cm×90.1cm

二. 149.3cm×97.1cm

三. 149.9cm×90.2cm

紙本彩色・3枚組 第IV期

町屋・山・水などが、朱・黄・緑・青等で描かれている。前述古図と酷似している。

第IV類

⑩ 「遠江国横須賀」(『諸国城図』所収) 東京大学史料編纂所蔵 [図2-14]

23.9cm×34.6cm・紙本彩色 第IV期

内郭を中心に描かれているが、侍屋敷等もかつての入江部分に書かれ、史料の周囲には、横須賀の代々の城主名などが記されている。

(4) 横須賀城街道図 [表2-4]

本類に属する史料は2本である。ここではさらに記載内容などから2種に分けて概説する。

第I類

① 「横須賀」(『遠江国図』所収) 蓬左文庫蔵

68.4cm×77.0cm・紙本彩色 第I～IV期

朱線で街道筋が示され、黄楕円の中に墨で地名が記されている。横須賀城内郭には単立式層塔型3層天守がみられる。模式的表現である。

第II類

② 「横須賀城」(『諸国城之図』所収) 蓬左文庫蔵 [図2-15]

39.0cm×693.0・紙本彩色・巻子本 第I～IV期

五畿七道にわたる代表的な城が描かれており、横須賀城は2つの櫓の他、単立式層塔型3層天守が描かれている。①と同様、模式的表現である。

[表2-4] 横須賀城街道図

| 絵 図 名 | 類 | 所 �藏 | 縦cm | 横cm | 時代 | 備 考 |
|----------|----|------|------|-------|--------------|--|
| ① 「横須賀」 | I | 蓬左文庫 | 68.4 | 77.0 | I ～ IV | 彩色書絵図 『遠江国図』の内 「遠江國十四郡貳拾八萬石城 三」の付記 |
| ② 「横須賀城」 | II | 蓬左文庫 | 39.0 | 693.0 | I ～ IV | 彩色巻子本 『諸国城之図』の 内 |

注：時代欄は第3章の区分による。

(5) 横須賀城その他絵図 〔表2-5〕

本類に属する史料は6史料である。これをさらに3類に分類して次に概説する。総じて模式的で、建築史的史料価値は少ない。

挿絵図類

- ① 「雲霧城」(『遠州誌』所収) 東京国立博物館蔵

23.3cm×20.0cm・紙本彩色

『遠州誌』の中に記された挿絵で、横須賀の名は見られないが、「小笠山」・「三日月堀」あるいは単立式層塔型4層天守であることなどから横須賀城がモデルになっていると推測できる。

絵巻類

- ② 「赤峯雲園」 大須賀町撰要寺蔵

27.2cm×523.4cm・紙本墨書き

墨絵の巻子絵巻で、「伝 横須賀城内庭園」の記がある。

絵画類

- ③ 「横須賀城之図」 静岡県立中央図書館蔵

38.0cm×100.5cm・紙本(写本のため仕様不詳)

3層天守や、門・櫓などが立体的に描かれており、「戊申之夏 梅澤」の添書があるが、近代の想像図である。

〔表2-5〕 横須賀城その他絵図

| 絵図名 | 類 | 所蔵 | 縦cm | 横cm | 備考 |
|---------------|-----|-----------|------|-------|-----------------------------|
| ① 「雲霧城」 | 挿絵図 | 東京国立博物館 | 23.3 | 20.0 | 彩色冊子本 『遠州誌』の内 |
| ② 「赤峯雲園」 | 絵巻 | 大須賀町撰要寺 | 27.2 | 523.4 | 墨書き冊子本 「伝 横須賀城内庭園」の付記 |
| ③ 「横須賀城之図」 | 絵画 | 静岡県立中央図書館 | 38.0 | 100.5 | 複写のため仕様不詳 「戊申之夏 梅澤」の付記 原蔵不明 |
| ④ 「横須賀城」 | 絵画 | | | | 『大須賀町誌』所収 |
| ⑤ 「横須賀旧城跡図」 | 絵画 | 阿部俊夫氏 | 34.0 | 63.6 | 彩色畫絵図 「大正年間 大須賀氏 講習云城…」の付記 |
| ⑥ 「横須賀城内外開墾地」 | 開墾図 | 大須賀町教育委員会 | 37.2 | 70.4 | 墨書き入絵図 |

④ 「横須賀城」 大須賀町誌所収

町誌所収のもので、内郭が想像図として描かれている。

⑤ 「横須賀旧城跡図」 阿部俊夫氏蔵

34.0cm×63.6cm・紙本墨書

木の間隠れに2層天守が描かれ、史料右上に「天正年間大須賀氏繩張之城…(後略)」の記述があるが、建築的表現は模式的である。

開墾図類

⑥ 「横須賀城内外開墾地」 大須賀町教育委員会蔵

37.2cm×70.4cm・紙本墨書・一部朱書

横須賀城内外を開墾した際の記録である。

2-2 文献類

横須賀城関係史料の中には文献に記されたものもあり、次にこれら13本をさらに「伝記」・「記録」・「編纂史料」・「地誌」の4類に分けて概説する。

(1) 伝記類

① 「遠州高天神記」

2巻。著者不明。軍記物で、徳川家康が武田勝頼方になった高天神城を奪いかえす為に、自ら現在の地に横須賀城築城を決定したことなどが記されている。

② 「高天神城戦史」

増田又右エ門・増田実著。横須賀城築城の経緯や所謂横須賀衆の名、城主の変遷などが記されている。

③ 「大須賀根元記」 内閣文庫蔵

高天神城戦やそこで活躍した大須賀組・城主などについて記されている。

- ④ 「横須賀根元記」 松本医院蔵
『大須賀根元記』に記載の件と、それ以降の概史が記されている。
- ⑤ 「翠園雜錄」 内閣文庫蔵
奥書にあるように、横須賀侯の徳政を記したもので、天保11年に翠園主人の記がある。
- ⑥ 「主図合結記」 蓬左文庫蔵
すでに絵図の部分については概説したが、他に領主石高についての記載もみられる。
- ⑦ 「遠州横須賀城図」 静嘉堂文庫蔵
すでに絵図の項で概説した通り、裏書として、領主・石高が記されている。ただし、前述『主図合結記』に記されたものと、若干年号等を異にしている。
- ⑧ 「雲霧城」（『遠州誌』所収）
絵画類の項で既に述べたが、横須賀城を指すとみられる雲霧城についての概説である。

(2) 記録類

- ① 「鍵帳」（『西尾忠良守財産調出控』所収）
最後の城主西尾忠篤が城を明渡す際、明治2年（1869）3月作成の書類。
廃城時の城の様子をうかがう上で不可欠な史料といえる。
- ② 「横須賀城払下げ記録」（『明治五年御用留帳』所収）
明治6年（1873）正月18日民間に払下げられる際の書類。城内立木・石垣・建物が記されている。

(3) 編纂史料類

- ① 「日本国誌叢書」
横須賀城が天正4年に築かれたこと等の概史である。

(4) 地誌類

① 『郷里雜記』

横須賀城築城の由来、代々の城主について記している。

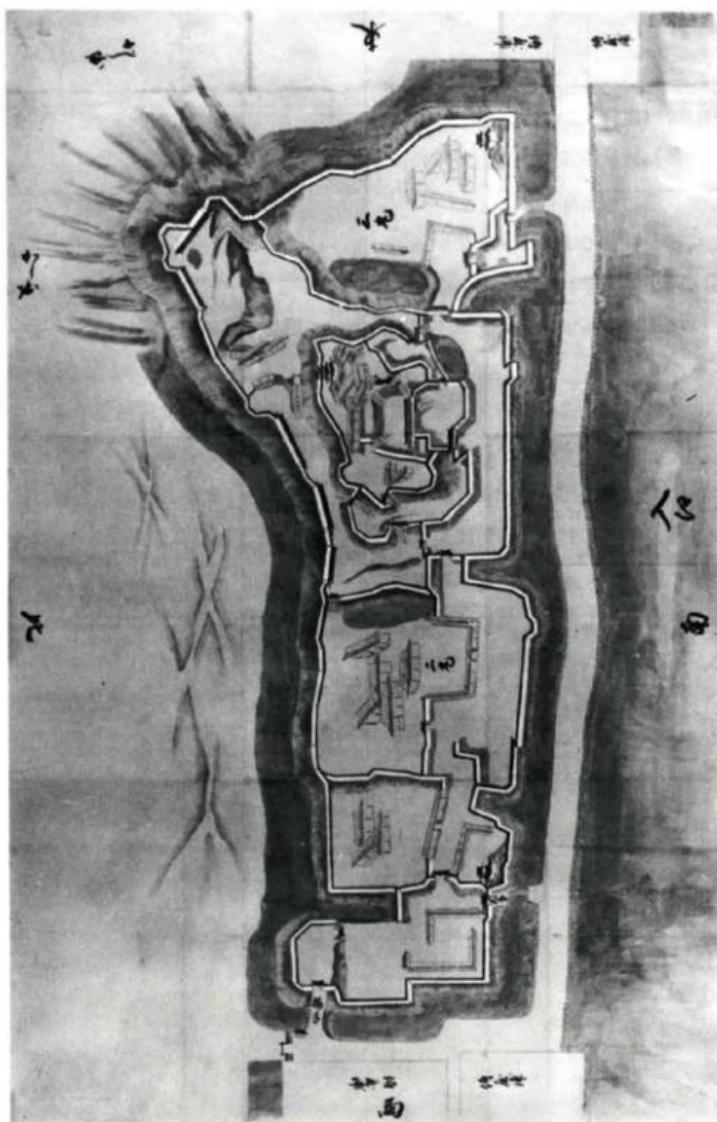
② 『遠州風土記傳』

横須賀城の由緒を記している。

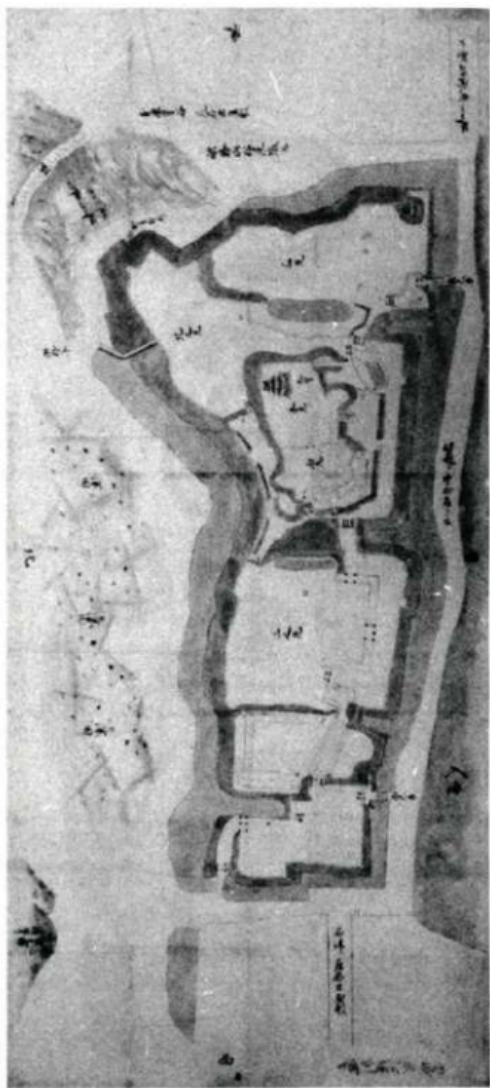
③ 『小笠郡誌』

横須賀城築城の由来、城主変遷について記している。

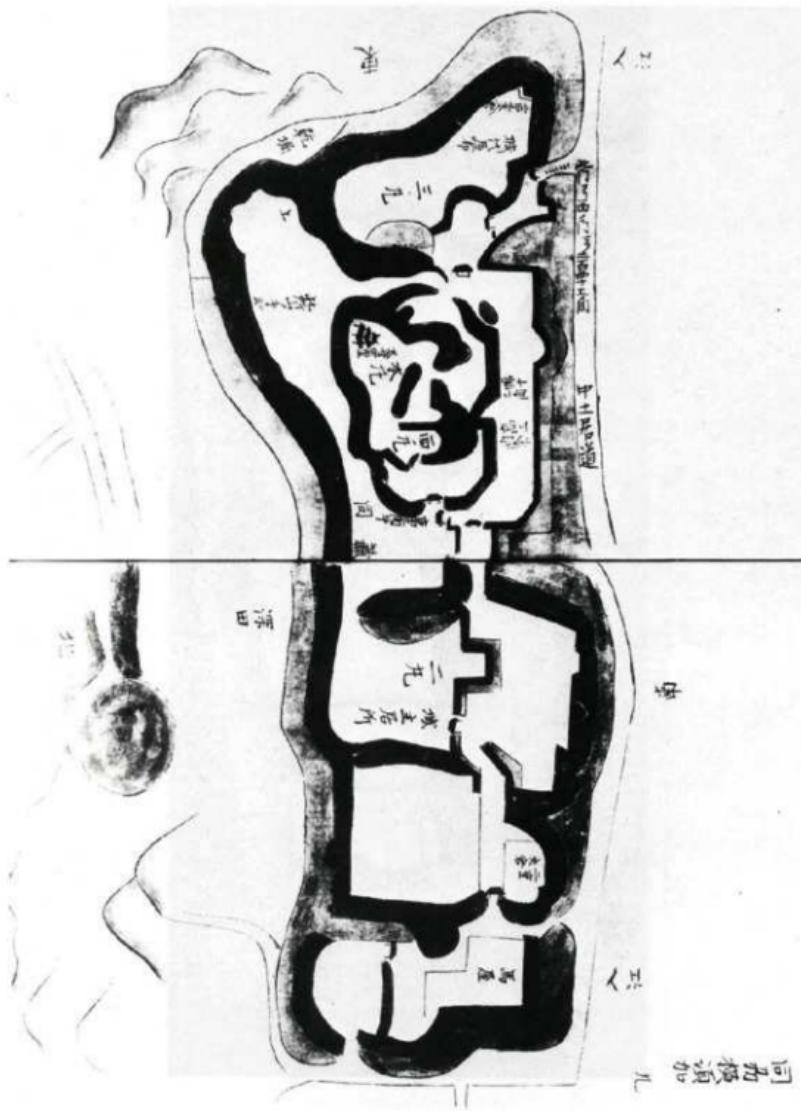
以上諸史料を通覧すると、横須賀城天守の様式は、移封単立式層塔型であることが、とりあえず確認できる。問題はその外觀层数であるが、もっとも信憑性の高い幕府の正保城絵図仕様で描かれた内郭図第1類が、すべて4層で描かれているのに対し、他類は3層が多く、時に2・5層の場合すらある。2・5層の史料は、あくまで模式図であり、この際問題外であるが、3層は、かなり意識したもので、特に「四重」の付記があっても3層のものが認められる。その詳細な分析と検討は第4章にゆずる。



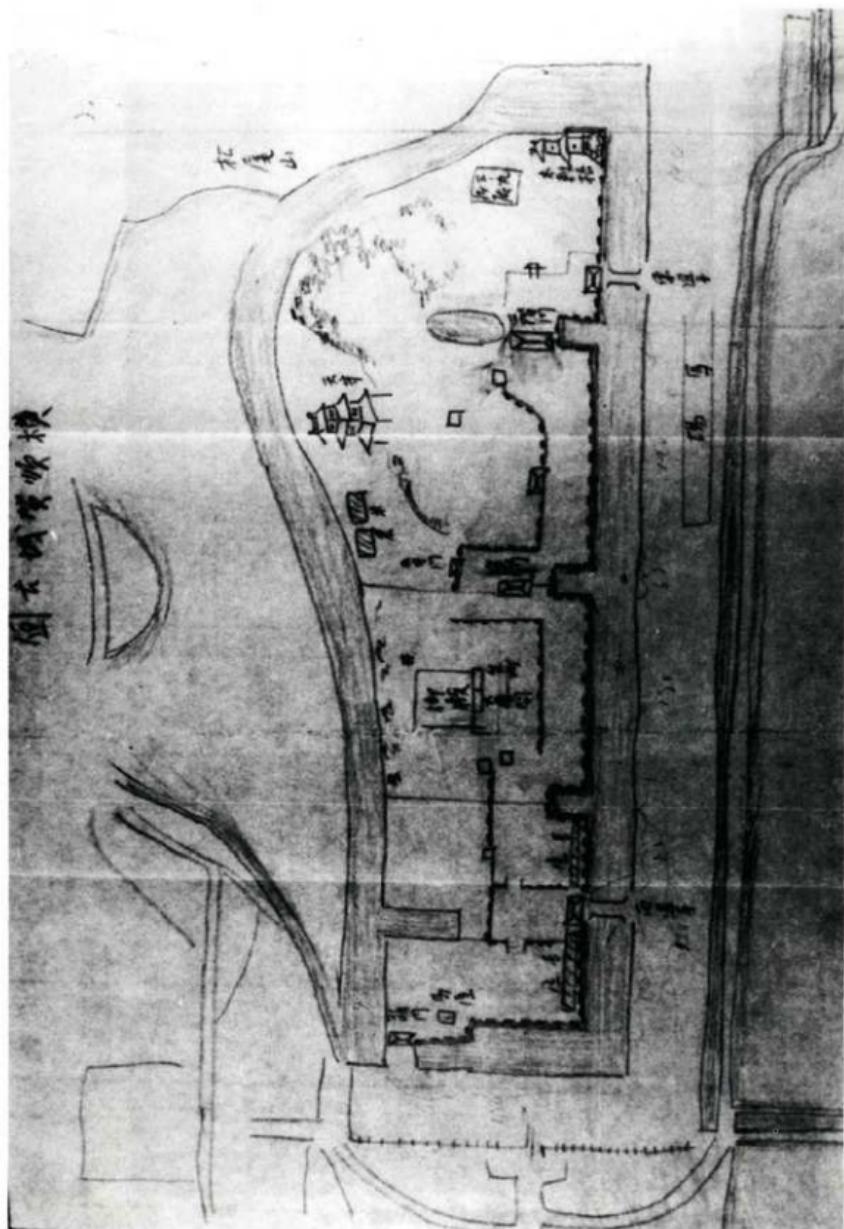
〔図2-1〕横須賀城内郭図第1類：国会図書館蔵「遠州横須賀城図」



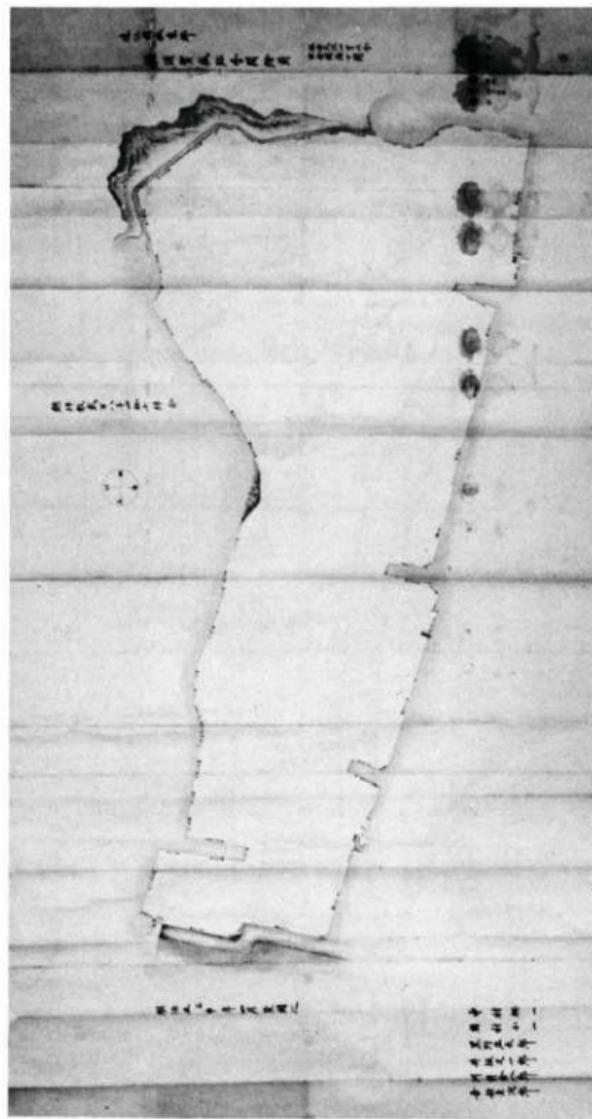
(図2-2) 横須賀城内郭図第II類：国会図書館蔵「遠州横須賀城図」



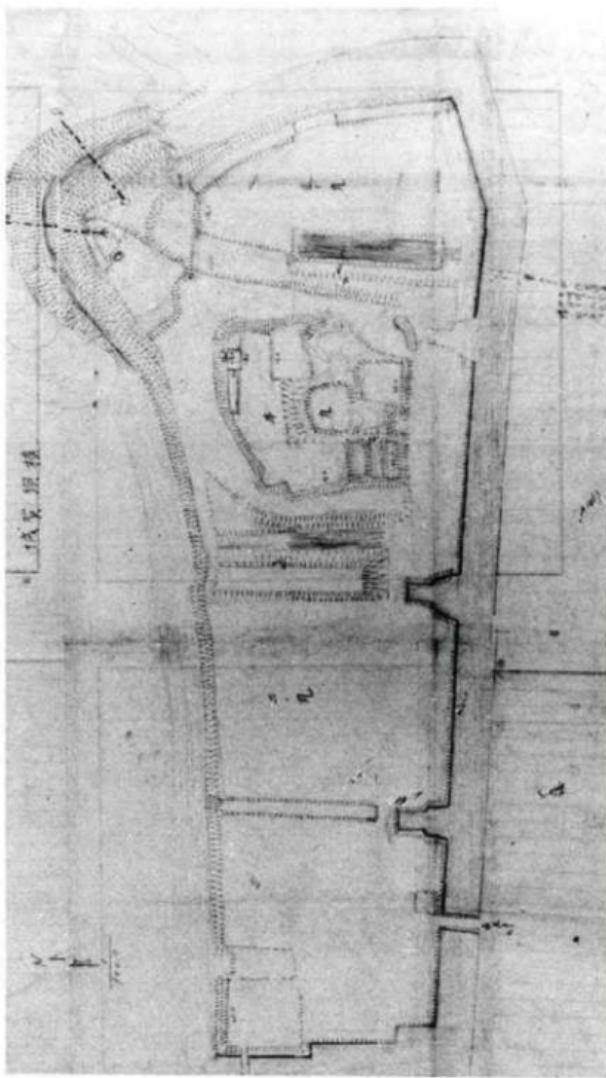
〔図2-3〕横須賀城内郭図第III類：天理図書館蔵「遠州横須加」



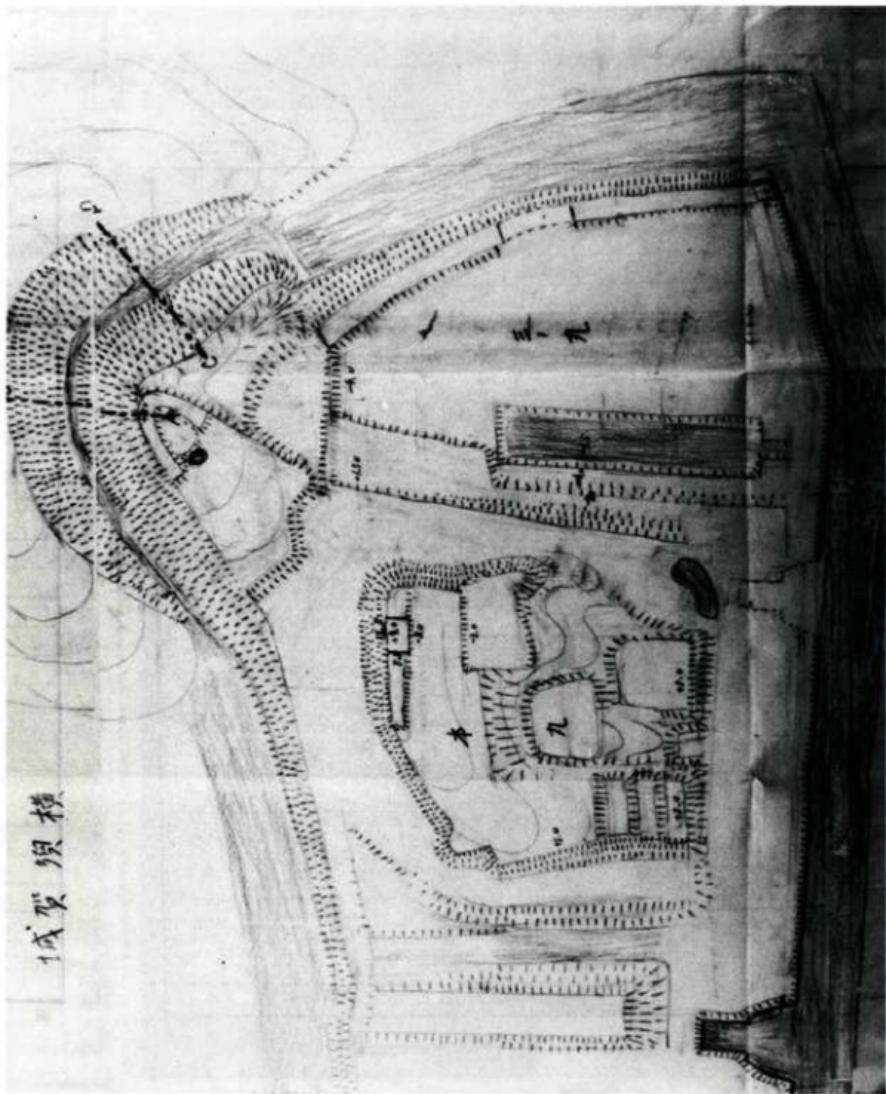
〔図2-4〕横須賀城内郭図第IV類：国会図書館蔵「横須賀城古図」



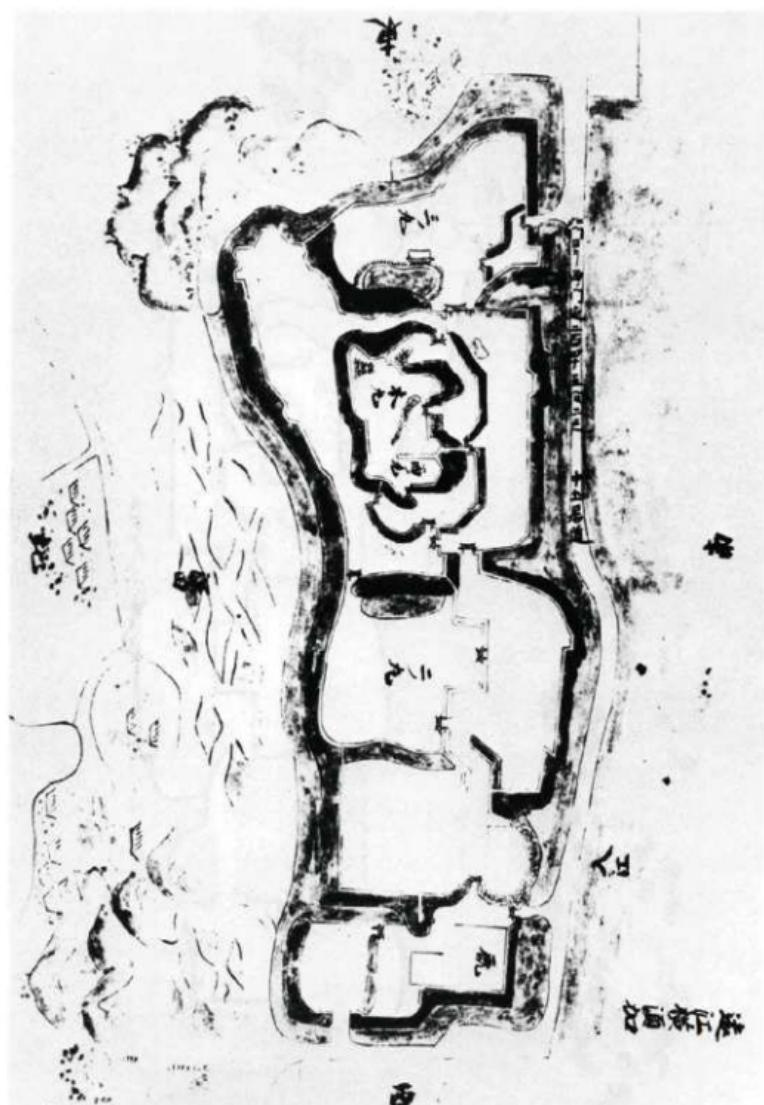
[図2-5] 横須賀城内郭図第V類：
大須賀町教育委員会蔵『横須賀城分間絵図』



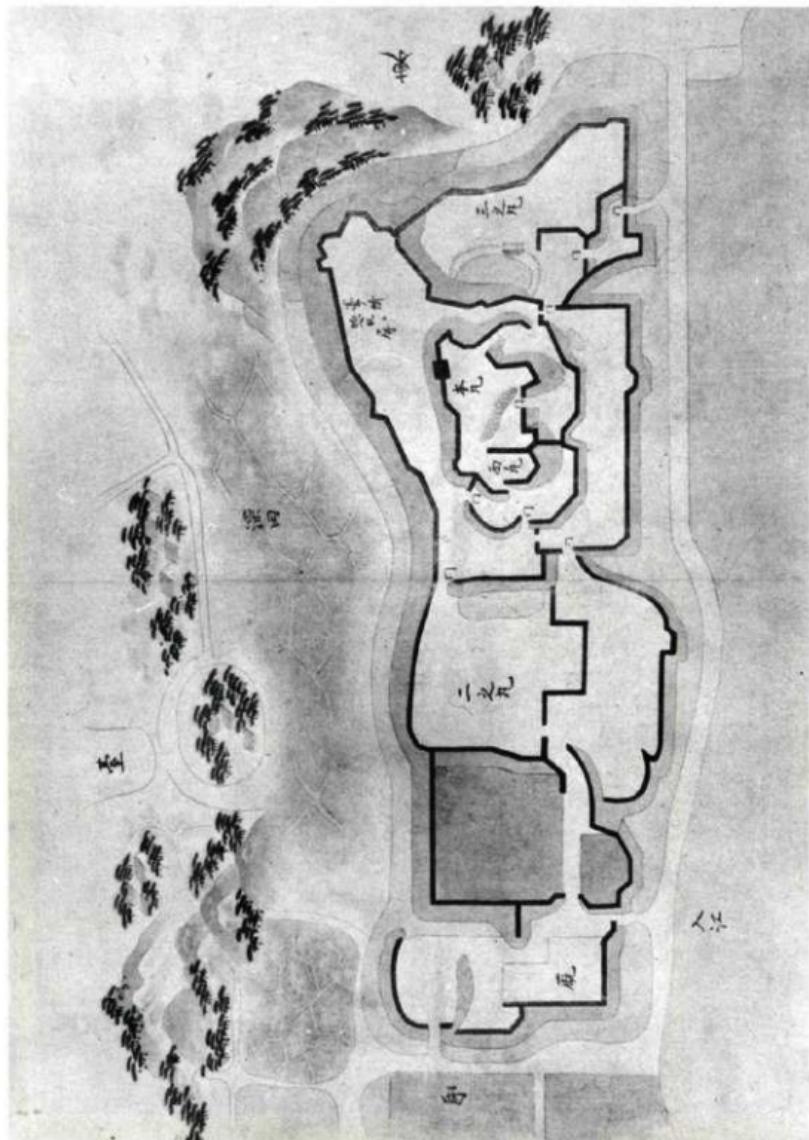
(図2-6) 横須賀城内郭図第V類：国会図書館蔵「横須賀城」



〔図2-7〕横須賀城内郭図第V類：国会図書館蔵「横須賀城」部分



〔図2-8〕横須賀城兵学図第1類：京都大学蔵「遠江横須加」



〔図2-9〕横須賀城兵学図第II類：尊経閣文庫蔵「遠州横須賀略図」

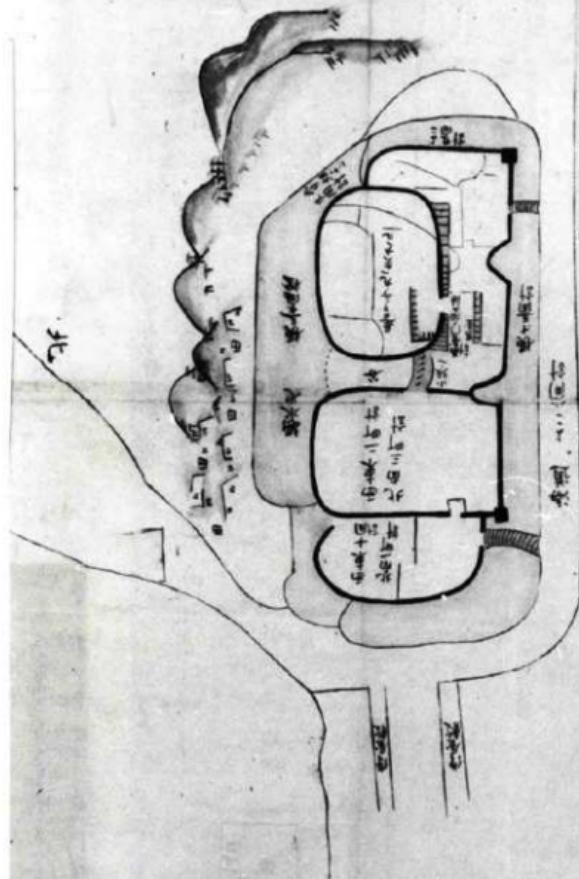
横須賀城

横須賀



横須賀

横須賀城



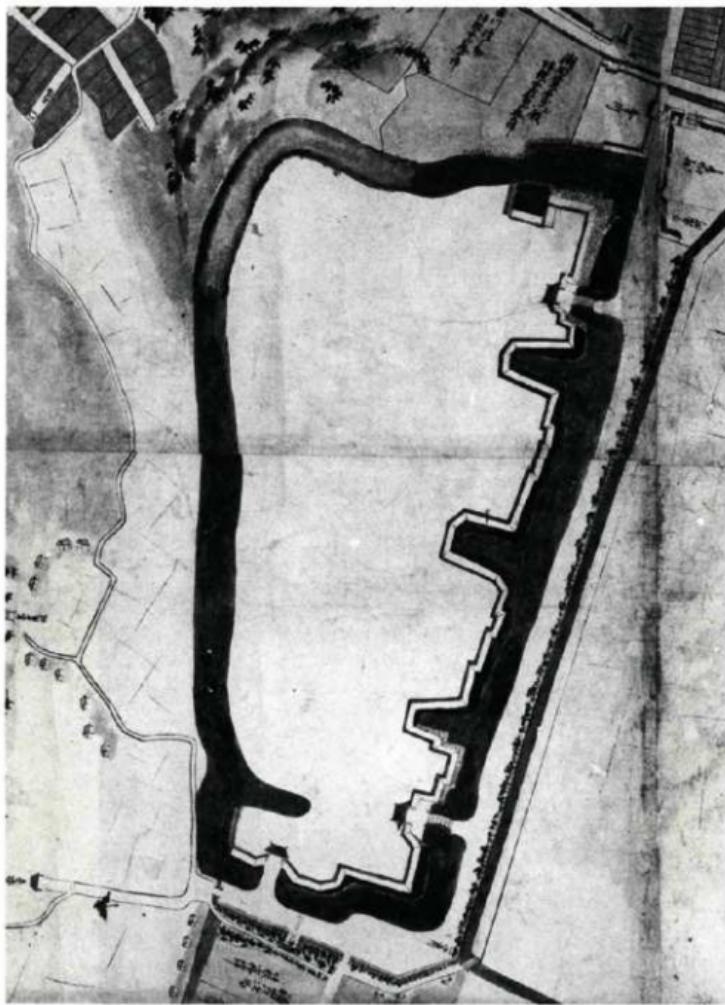
〔図2-10〕 横須賀城兵学図第III類：蓬左文庫蔵「遠州横須賀城図」



〔図2-11〕横須賀城城下町図第1類：
阿部俊夫氏藏「横須賀城并家中絵図」

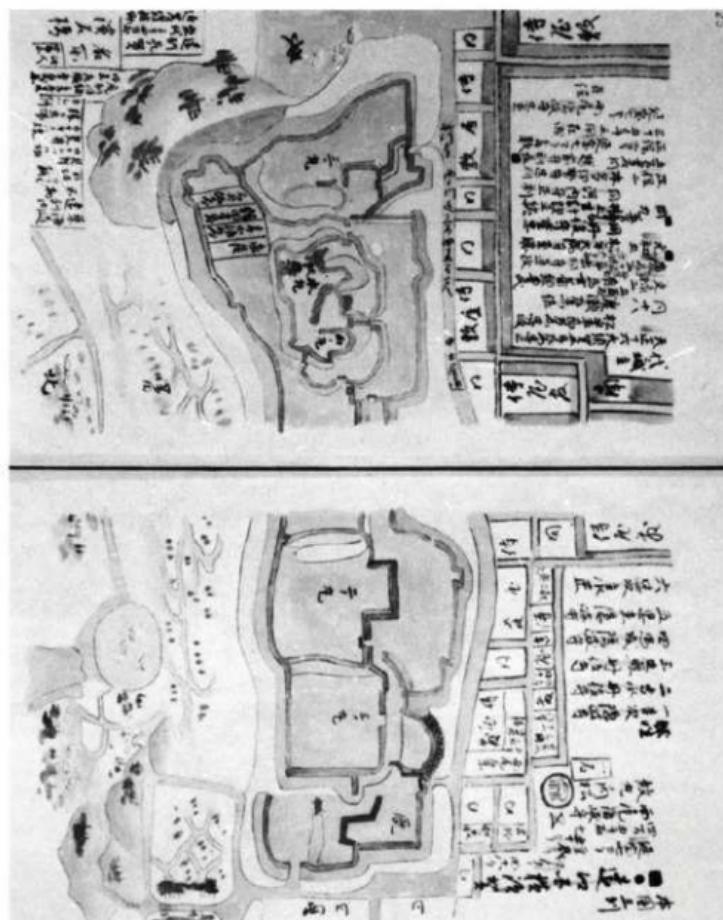


〔図2-12〕 横須賀城城下町図第II類：
大須賀町撰要寺藏「遠州横須賀惣絵図」



〔図2-13〕 横須賀城城下町図第III類：

大須賀町教育委員会蔵「横須賀城下古図」部分



[図2-14] 横須賀城城下町図第IV類：

東京大学史料編纂所蔵「遠江国横須賀」

遂江



[図2-15] 横須賀城街道図第II類：蓬左文庫蔵「横須賀城」

第3章 横須賀城の歴史

横須賀城の歴史を通観する際に、特に都市史、建築史的にみて、次の第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ期に大別されるので、以下その概要をのべる。

3-1 第Ⅰ期：天正6年（1578）～寛永5年（1628）

長篠戦後、病を得て没した武田信玄にかわり父の遺志を継いだ勝頼は、天正2年（1574）大举して高天神城攻めを行っている。当時城主であった小笠原長忠は浜松城にあった家康に援軍を求め、さらに家康も信長に援軍を請うたものの、ついには防戦及ばず城を武田方に開け渡すに至る。

しかし高天神城を失ったとはいえ家康の東征意欲は衰えず、高天神城奪回にむけて対策を練り、その第一として高天神城に対して位置のおもわしくない馬伏塚城に代えて、横須賀の地を新城地として選定している。

家康の命を受けて城地検分を行った大須賀康高は、最終的には家康の決断により、いくつかの候補地の中から王子権現を小谷田に移した上で、その跡地付近一帯を城地と決定している。

この地は、小笠山から続いている支脈丘陵の一部を含み、周辺の平地を併せた地域で、北は山地、南は海を控え、兵学書にいう「後堅岡」の地形であると共に、水運にも恵まれた交通の要地であった。

横須賀城築城工事が始まったのは天正6年（1578）のこと、当初は単なる高天神城攻めの基地としての城であったことから、大規模工事は望むべくもなかったと考えられる。そのため、普請（土木工事）はある程度本格的に

行わざるを得なかったとしても、作事（建築工事）はかなり簡略化されたものと考えられ、同 8 年（1580）に一応の完成をみている。家康も浜松から竣工の祝賀の為に駆け付け、それまで馬伏塚城主であった康高を初代城主に任命、よって馬伏塚城を廃城としている。

しかし、この城はあくまでも高天神城攻めの為に造られた城に過ぎず、いわば中世城郭としての性格が強い。横須賀城が近世城郭として変貌を遂げるのは、天正 9 年高天神城落城の後と考えられる。

その時期を具体的に記す史料が、『横須賀三社縁起私記』で、

二代大須賀国千代丸八才ニテ家督相続アリ、後松平出羽守忠政公ト号ス、此御代ニ天守ヲ立ツ、城ノ表向敵土居ノ上小藪ニテ堀モ水無キ搔上ケ堀ナリ、谷口通リニ侍町ヲ立テ、城前ニ片平町モアリ、石津家中侍町立チ、町割モ定マリ、…後略…

とあるが、詳細は不明である。後世の史料と比較・検討するならば、およそ本丸・北丸・西丸のおよそ 3 郭よりなる梯郭式の比較的単純な網張であったことが推定される。

ここで注目すべきは、家康がようやく落城させた高天神城を、武田方から奪回しながらも廃城にしてしまったという点である。つまり高天神城のような山城の形式をもつ城よりも、将来的には港・町・街道等の都市機能を包含できる平山城の方が役立つということを見透していたわけで、家康の政治的理念を伺うことができると同時に、近世城郭・都市への過渡期に位置する横須賀城の歴史的価値を示していよう。

3-2 第二期：寛永 5 年（1628）～正保 2 年（1645）

横須賀城が中世城郭的要素の強い城郭から本格的な近世城郭へと変貌したのは、第11代城主井上河内守正利の時代からである。

正利は父の第10代城主正就の後を繼いで寛永5年に城主となり、翌年入部、家中の為に西大渕の農家や寺を移して番町に侍町を造成、東部にも町を開いている。

城の惣堀の掘り上げも行われたことは『横須賀三社縁起私記』に詳しく、正保元年甲申春ヨリ足軽・中間・家中ノ人足、在各町ノ人夫ヲ以テ、城ノ惣堀ヲ掘セ、石垣屏ヲ築カセ、西大谷河原ヲ上ヨリ下ヘ深ク堀割ル、普請奉行ハ永田六左衛門知行三百石也、…後略…

とある。横須賀城下の場合、惣堀とは内郭外堀のことと解され、具体的には、第1期の本丸・北丸・西丸の東側に三丸を付加し、梯郭式の繩張を北・東・西の3方向に拡張した段階を記したものと考定される。

3—3 第III期：正保2年（1645）～宝永4年（1707）

正保2年（1645）8月、5万石で城主となった第12代本多越前守利長は正利の甥にあたるが、幼少であったため入部したのは、降って承応2年（1653）のことである。

領地高が多く、当然にして家臣も多かったために城下に侍町や足軽町を新たに造ると共に、繩張の大改造を続行しており、同じく『横須賀三社縁起私記』によれば、

寛文元年辛丑年利長公大坂御勤番ナリ、同四年御城内ニノ丸普請始マル、新規ニ建ツ、同六年丙午年、石津平地ニナル、高キ砂山ヲ両脇ヘ數日引平ケテ、町屋立ツ、足軽町モ建ツ、…後略…

とある。要するに、第II期三丸の拡張に関連して西丸に二丸を拡充し、従来の単純な梯郭式繩張から、連郭式繩張との混合型に変容させている。ここにおいて横須賀城の近世城郭としての構成「梯郭+連郭」式が定まったわけで、5万石の大名の城と城下町にふさわしい規模が整えられたのである。

また領内の土木工事も行い、浅羽の村々を洪水から守るために延長3里18町（約14km）に達する大堤防を築くなど、西大渕の十内沢が設けられたのもこの時代である。一方、延宝7年（1679）三社権現の社殿修理に際しては、金品を奉納して神儀を盛大に行わせている。

このように38年の城主在任中数々の業績を残してはいるものの、半面奢侈遊楽を好んだため、天和2年（1682）4月、その科で1万石となって出羽村山へ移封されている。

3-4 第IV期：宝永4年（1707）～明治元年（1868）

第13代城主西尾隱岐守忠成の治政、宝永4年（1707）11月にいわゆる宝永の大地震が東海地方を襲っている。この地震は、東海地方を中心に多大な被害を引き、良港を従えた海際の城であった横須賀城も、突然の土地隆起によって内陸部の城となっている。

駿府城においても石垣が崩壊したほどであるから、横須賀城においても少なからぬ被害を受けたと思われるが、残念ながらその詳細は不明である。

ただ近年の発掘調査で石垣の積み直しが確認されており、その被害のほどが知られる。

3-5 第V期：明治元年（1868）～

文久元年（1861）10月に横須賀城最後の城主となった西尾隱岐守忠篤は、慶応4年（1868）徳川亀之助（家達）が駿府城主となり静岡藩が出来したために、房州花房へ43500石で移封を命ぜられている。同時に横須賀城も静岡藩のものとなり、さらに明治2年6月の版籍奉還で新政府の支配するところと

〔表3-1〕 横須賀城歴代城主一覧

| 期 | 代 | 城主名 | 時代 | 祿高 | 備考 |
|--------|-----|-----------------|----------------------------|--------------|--------------|
| I 期 | 初代 | 大須賀五郎左衛門 尉康高 | 天正8年～天正16年 (1580～1588) | 3万石 | 没年62才 |
| | 2代 | 大須賀出羽守忠政 | 天正16年～天正19年 (1588～1591) | 3万石 | 上総久留里(千葉県)移封 |
| | 3代 | 渡瀬左衛門佐證繁 | 天正19年～文禄4年 (1591～1596) | 3万石 | 碓氷峠で切腹 |
| | 4代 | 有馬玄蕃頭豊氏 | 文禄4年～慶長6年 (1595～1601) | 3万石 | 丹波福知山(京都府)移封 |
| | 5代 | 松平出羽守忠政 | 慶長6年～慶長12年 (1601～1607) | 5万5千石 | 没年27才 |
| | 6代 | 松平五郎左衛門忠次 | 慶長12年～元和元年 (1607～1615) | 5万5千石 | 上野館林(群馬県)移封 |
| | 7代 | 徳川常陸介頼宣 | 元和元年～元和5年 (1615～1619) | 駿遠太守 50万石 | 和歌山移封 |
| | 8代 | 松平大隅守重勝 | 元和5年～元和6年 (1619～1620) | 2万6千石 | |
| | 9代 | 松平丹波守重忠 | 元和6年～元和9年 (1620～1623) | 2万6千石 | 出羽上の山(山形県)移封 |
| | 10代 | 井上主計頃正就 | 元和9年～寛永5年 (1623～1628) | 5万2千石 | 老中、没年52才 |
| 第II期 | 11代 | 井上河内守正利 | 寛永5年～正保2年 (1628～1645) | 4万5千石 | 常陸笠間(茨城県)移封 |
| | 12代 | 本多越前守利長 | 正保2年～天和2年 (1645～1682) | 5万石 | 出羽村山(山形県)移封 |
| | 13代 | 西尾隱岐守忠成 | 天和2年～正徳3年 (1682～1713) | 2万5千石 | 没年61才 |
| 第III期 | 14代 | 西尾隱岐守忠尚 | 正徳3年～宝曆10年 (1713～1760) | 3万5千石 | 老中、没年72才 |
| | 15代 | 西尾主水正忠需 | 宝曆10年～天明2年 (1760～1782) | 3万5千石 | 没年74才 |
| | 16代 | 西尾隱岐守忠移 | 天明2年～享和元年 (1782～1801) | 3万5千石 | 没年56才 |
| | 17代 | 西尾隱岐守忠善 | 享和元年～文政11年 (1801～1828) | 3万5千石 | 没年63才 |
| | 18代 | 西尾隱岐守忠固 | 文政12年～天保14年 (1829～1843) | 3万5千石 | 没年47才 |
| | 19代 | 西尾隱岐守忠受 | 天保14年～文久元年 (1843～1861) | 3万5千石 | 没年41才 |
| | 20代 | 西尾隱岐守忠篤 | 文久元年～明治元年 (1861～1868) | 3万5千石 | 安房花房(千葉県)移封 |

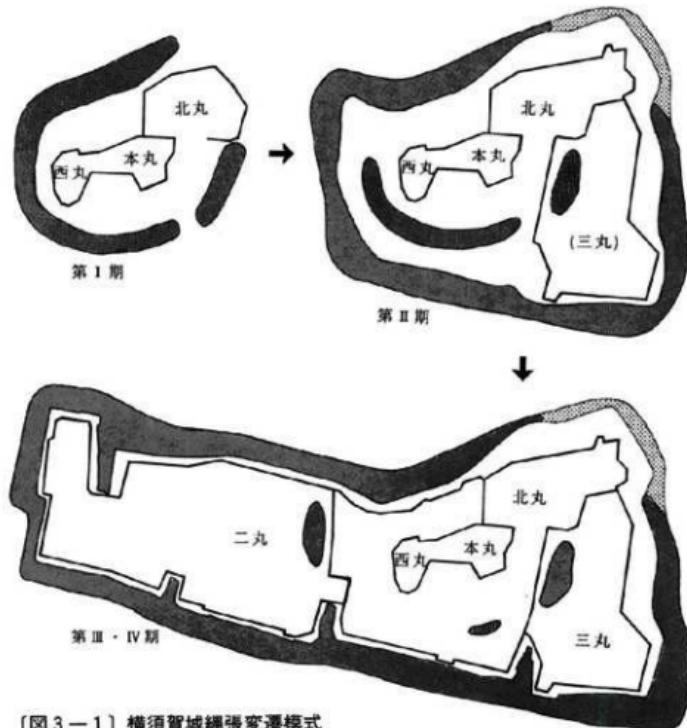
なったが、新政府は駿遠の城を廃城とする方針を示し、8月24日付で下のような布令をしている。

静岡城之外駿遠城々之儀被廢候旨被令候

右之通り為心得申達町中江不洩様可触もの也

しかし、しばらくの間、城地はそのままに放置され、明治6年ようやく横須賀城の建物・城地等を払い下げる旨が通達された。払い下げ先等の詳細は明らかでないが、追手門の1つは普門寺に、不開門は撰要寺山門（現存）となつたことなどが知られている。

以来今日迄、遺跡の状態は本質的に変化ない。



〔図3-1〕横須賀城繩張変遷模式

第4章 横須賀城の建築

徳川家康の命を受けて、天正6年（1578）大須賀康高が築城工事を始めて以来、前章横須賀城の編年に従えば第I期・第II期において、梯郭式平山城の構成をもつ近世城下町計画の実施をみる。さらに第III期において本多利長は、二丸を西方に拡大して、「梯郭+連郭」式の複合式繩張を整え、以来大局において変化ない。

そこで、第III期の城下町図の現存最良資料である『正保年間横須賀城下之図』（本図は寛文4年以降の図であるが、幕府城絵図の規準に従うためにその名称がとられたものと考えられる。詳細は後考）を1/10000現状図上に復元投影して、その城下町規模を計測し、併せて、史料が全国的にそろう正保～寛文年間（1650年頃）他城下町との比較をおこなえば〔表4-1〕ごとくになる。

そもそも城下町の住区別構成は、城を中心とした武家地と、周辺に配される町人地・寺社地よりなるが、その他空地を含めて、全国城下町の平均総面積規模は、 2.00km^2 弱程度である。そこで 3.00km^2 以上を大都市、 3.00km^2 未満～ 1.00km^2 を中都市、 1.00km^2 未満を小都市とすれば、横須賀城下町は 1.22km^2 で、中都市となる。武家地・町人地・寺社地・その他の比率は、大様総面積の60%・20%・15%・5%程度を一般とするが、横須賀の場合、その他の空地が13.1%と多く、その分町人地が16.4%、寺社地が11.5%とやや少ない。概して城下町としての全国的平均像を示す。

そこで注目すべきは、天守を中心とする「梯郭+連郭」式の都市計画をとる内郭部の面積である。 0.13km^2 で、実に総面積の10.7%に達している。この内郭率（内郭面/総面積）は、一般に5～6%程度であるが、大城郭建築を今

日に伝える姫路城でさえ9.4%であるのに比して、極めて大きい。これ以上の城下町は、家康在世中の駿府(13.3%)のみで、例外中の例外といえ、「城でもつ横須賀」の実態を具体的に示していく興味深い。

この内郭率の大きい横須賀城の特質は、直接には、「梯郭+連郭」式の繩張によるものと考えられるが、それだけに内郭の構成は、複雑にして技巧的である。本章はその技術的内容を復元的に論ずるが、残念ながら遺跡が盛期の旧状をとどめるところ少ないので、まず史料の検討より、建築史ないしは都市的考察を始める。

4-1 横須賀城史料の検討

第2章で書誌学的考察をおこなってきた横須賀城および城下町史料のうち、とりあえず最古の類と目されるのは、撰要寺藏『正保年間横須賀城下之図』である。原本は伝わらず、旧阿部俊夫氏蔵で、昭和7年写とされる。同類(横須賀城内郭図第I類)には、正徳3年ないしは5年の原図による写本の大須賀城教育委員会蔵『正徳年間横須賀城下之図』・同『横須賀御城及御城下図』・阿部俊夫氏蔵『横須賀城井家中絵図』[図2-11]・静岡県立中央図書館蔵『横須賀城下之図』が知られているが、いずれも、縦80cm×横165cm程の法量をもつ紙本彩色絵図であるという書誌的共通性をもち、内容も一部写本時の描質差以外同一とみなされる。

その中、原本の成立過程ないしは伝来経緯が明らかな図は、阿部俊夫氏蔵本である。その由来を読した「坂下谷、隠士阿部勝繁」の箋として「阿部勝繁六十一歳／明和八年辛卯二月」の「百二十余年」前(明和8年=1771から単純に数えると1651=慶安4年頃)に、勝繁の「曾祖勝之」が「正保年中、之の岡崎より居を横須賀に移すの時、松本氏祖父翁の世に在り、勝之士務のいとま好て山野川海ニ優遊」する時代の史料とされる。

[表4-1] 江戸時代初期(1650頃)における諸城下町住区別面積

| 都 市 名 | 年 代 | 純 面 積 ⁽¹⁾ | 公 家 地 | 武 家 地 | (内割合%) | 町 人 地 | 寺 地 | 空 そ の 地 | 内 宅 面 積 ⁽²⁾ | 面 原 史 |
|------------------|---------------------|-----------------------------------|--------------------------------|----------------------------------|---------------------------------|---------------------------------|---------------------------------|---------------------------------|------------------------------------|-------|
| 江 戸 | 正保元年 (1644) | 43.95 km ² (100.0%) | — | 34.06 km ² (77.5%) | 4.29 km ² (9.8%) | 4.50 km ² (10.2%) | 1.10 km ² (2.5%) | 2.25 km ² (5.2%) | 『延宝年間江戸築城』による。 | |
| 京 都 ^a | 正保年間 (1647頃) | 20.87 km ² (100.0%) | 0.08 km ² (5.0%) | 1.06 km ² (5.0%) | 2.92 km ² (14.0%) | 7.35 km ² (37.6%) | 0.21 km ² (1.0%) | 7.35 km ² (37.6%) | 『延宝後万治前京都全圖』(京都大 学蔵『中井家文稿』)による。 | |
| 大 阪 | 明暦3年 (1657) | 14.15 km ² (100.0%) | — | 3.36 km ² (23.7%) | 7.40 km ² (52.7%) | 1.18 km ² (8.3%) | 2.22 km ² (15.7%) | 0.59 km ² (4.2%) | 『新板大阪之図』による。 | |
| 仙 台 | 正保年間 (1647頃) | 10.37 km ² (100.0%) | — | 7.56 km ² (72.9%) | 1.15 km ² (11.1%) | 1.66 km ² (16.0%) | — | 0.54 km ² (5.2%) | 『陸の国出白山城築城』(瀬戸内懇親会 議)による。 | |
| 名 古 屋 | 万葉朝開 (1650頃) | 9.30 km ² (100.0%) | — | 5.69 km ² (61.8%) | 2.18 km ² (23.7%) | 1.14 km ² (12.4%) | 0.19 km ² (2.1%) | 0.19 km ² (2.1%) | 『名古屋御城築城』(名古屋城管理 事務所蔵)による。 | |
| 金 芝 | 正保年間 (1647頃) | 7.46 km ² (100.0%) | — | 4.91 km ² (65.8%) | 1.58 km ² (21.2%) | 0.79 km ² (10.6%) | 0.18 km ² (2.4%) | 0.23 km ² (3.1%) | 『加賀國金芝城築城』(金沢市立図 書館蔵)による。 | |
| 越 府 | 元和2年 (1616) | 3.53 km ² (100.0%) | — | 2.13 km ² (60.4%) | 0.05 km ² (29.7%) | 0.20 km ² (8.2%) | 0.06 km ² (1.7%) | 0.17 km ² (4.7%) | 『越後國鶴岡城築城』(秋田氏次第 氏田藏)による。 | |
| 堺 路 | 寛文2~7年 (1649~54) | 2.66 km ² (100.0%) | — | 1.41 km ² (53.0%) | 0.72 km ² (27.1%) | 0.13 km ² (4.9%) | 0.40 km ² (15.0%) | 0.25 km ² (9.4%) | 『堺路市役所委員会蔵』による。 | |
| 中 津 山 | 正保年間 (1647頃) | 1.88 km ² (100.0%) | — | 1.24 km ² (66.0%) | 0.45 km ² (23.9%) | 0.13 km ² (6.9%) | 0.05 km ² (3.2%) | 0.09 km ² (4.8%) | 『作田津山城築城』による。 | |
| 那 間 賀 | 寛文年間 (1665頃) | 1.22 km ² (100.0%) | — | 0.72 km ² (59.0%) | 0.20 km ² (16.4%) | 0.14 km ² (11.5%) | 0.10 km ² (13.1%) | 0.13 km ² (10.7%) | 『那賀賀町所要寺蔵』(大浪賀町所要寺蔵)による。 | |
| 市 松 | 正保年間 (1647頃) | 1.01 km ² (100.0%) | — | 0.42 km ² (41.6%) | 0.53 km ² (52.5%) | 0.08 km ² (5.9%) | — | 0.08 km ² (7.9%) | 『伊勢田松古城之図』 (内蔵文庫蔵)による。 | |
| 掛 川 | 正保年間 (1647頃) | 1.00 km ² (100.0%) | — | 0.60 km ² (60.0%) | 0.32 km ² (32.0%) | 0.02 km ² (2.0%) | 0.05 km ² (8.0%) | 0.06 km ² (6.0%) | 『蒲州掛川城』(大浪賀文庫)による。 | |
| 西 尾 | 正保年間 (1647頃) | 0.62 km ² (100.0%) | — | 0.47 km ² (75.8%) | 0.14 km ² (22.0%) | 0.01 km ² (1.6%) | — | 0.03 km ² (4.8%) | 『三河西尾城』(伊丹市少林院蔵)によ る。 | |
| 那 田 中 | 正保年間 (1647頃) | 0.53 km ² (100.0%) | — | 0.40 km ² (75.5%) | 0.17 km ² (22.6%) | 0.01 km ² (1.9%) | — | 0.05 km ² (9.4%) | 『田中城』(藤枝市立西野歴史 博物館)による。 | |
| 市 日 出 | 正保年間 (1647頃) | 0.29 km ² (100.0%) | — | 0.16 km ² (55.2%) | 0.11 km ² (37.9%) | 0.02 km ² (6.9%) | — | 0.02 km ² (5.9%) | 『豊臣日出城築城』(内蔵文庫蔵)によ る。 | |

注: 1) 本データは、選原史料間に示す各町地盤面積を1/10000地図に複元計算したもの。
2) 面積の面積は、墨土石よけ施設等を除く。ただし、江戸城、姫路城は別格で含んでいる。(内蔵文庫蔵/内蔵文庫/絵画蔵)

当時は、すでに先章で編年したように、横須賀城史の第III期にあたり、すでに井上正利による正保元年（1644）外掘・三丸普請のあと、翌正保2年本多利長の入封あって寛文4年（1664）からは、二丸が築造される時期である。

したがって、同じ阿部家の所蔵にかかる昭和7年阿部俊夫氏写なる現撰要寺蔵『正保年間横須賀城下之図』の題名は、必ずしも適切でない。内容が第III期それも二丸が築造されて「梯郭+連郭」式の構成を示す以上、少なくとも寛文4年以降の城下図である。

しかし、あえて「正保年間」をうたう事由も理解される。すなわち、「正保以降の工事をふくめた第III期正利時代の図」という程の意であり、それが上記阿部勝之の代で記録されたと判断される。そして阿部俊夫氏蔵『横須賀城井家中絵図』の付記にいう「正徳五乙未年五月改写」も、上記勝之時代の原本を正徳期に再写したものと理解できる。さらには、大須賀町教育委員会蔵『正徳年間横須賀城下之図』にある「本図ハ正保年間ノ原図ニ依リ正徳年間西尾家之中ノ屋敷ヲ転入シタルモノナルベシ」の添書もこの際整合性をもつ。要するに、横須賀城下町図最古の類である城下町図第I類は、「利長時代の正保～寛文期」にかけの普請結果を示すものと考えられる。

しかしながら、そうした期に何故に城下図が作成されたのであろうか。単に横須賀藩で記録を留めたという以上に、その必然性が考えられる。

本城下町図第I類に共通する特色として、内郭中枢本丸部に4層の単立式天守を描く他、その下方に本丸「御殿」、その右下三丸に面して「二階門」、さらに右側に「仕切上の門」をへて二丸2層櫓（太鼓櫓）や「東大手門」を記す。また本丸の左側には裏門をへて、二丸の「西大手門」や「搦手門」を描く。

加えて城下には、侍町や町人地・寺社地を記すわけであるが、この際特に注目されるのは、主要道路の中央に朱線が入っている点である。これは、幕府が、全国城下町の実態調査として、正保元年より各藩に求めたいわゆる「正保城絵図」の仕様であり、本類は、単に先記第III期利長時代の図という以上

に、あえて「正保年間」をうたう紙背の意味（すなわち幕府「正保城絵図」規準による正式絵図）を理解する必要があろう。

利長の入封時は、ちょうど幕府が各藩に「正保城絵図」の調査を命じた直後である。当然にしてその調製提出の義務があるわけであるが、利長自身が幼少にして横須賀へ入部したのは承応2年（1653）であり、さらに新しい5万石にふさわしい城たるべく二丸と城下町屋足軽町の拡張が計られる転換期にあたっている。したがって横須賀藩の「正保城絵図」仕様による実態調査は、寛文以降におくれざるを得ないわけで、掛川城等臨接城下町の「正保城絵図」が幕府正庫におさめられているにもかかわらず、本横須賀城下が幕府庫蔵本として求められない事由も理解される。

そこで、本類が「正保城絵図」仕様に準じてることの具体的な内容をあらためるためにあたって、その仕様規準を次に述べる。

4—2 正保城絵図仕様との関連

豊臣政権の天下統一以来、日本全土の地理把握に供なう都市すなわち城下町の実態調査は、永らく体制サイドの懸案とされていた。桃山時代の慶長期におけるいわゆる「慶長国絵図」の作製を各藩に求める行為を先駆として、江戸時代に入ると、徳川幕府は正保期において徹底した調査を命じている。俗にいう「正保国絵図」および「正保城絵図」がそれで、幕府の定めた規準により郷帳の調製を求めて、領地の実測調査を行わしめ、特に城下は詳細を求めていた。本格的な国勢調査ともいべき性格をもち、わけても「正保城絵図」は、都市の実態を具体的に掌握する直接の目的をもっていた。

(1) 調査規準

『大猷公治世略記』によると、正保元年（1644）12月25日正式に各藩へ示

達され、内容は30項目におよぶ。その中、「城絵図」に関するものは、初項から第9項迄の次であった。

城絵図之事

一、本二三丸間数之事

一、堀乃ひろさ深サ之事

一、天守之事

一、惣曲輪広サふかさ之事

一、城より地形高所在之者高キ所より城との間、間数遣付之事

一、但シ、惣構より外ニ高所有之共書付之事

一、侍町小路割井間数之事

一、町屋右同断

一、山城平城書様之事 (以上『忠宗君記録引証記』)

こうした絵図作製の規準は、実際にはさらに詳細におよんだ模様で、各藩に関連覚書が伝えられている。代表例として外様大名の秋田藩の場合を示めば、『秋田郡窪田絵図帳』と題され、正保4年9月7日に作製されている。この内容は、

一、山城 東ハ小山太山ニ統く

西ハ海本丸より海辺迄一里八町

北ハ小山太山ニ統く

南ハ大川

一、本丸 東西六拾五間 東二丸 此地形より四丈四尺高
南北百武拾間

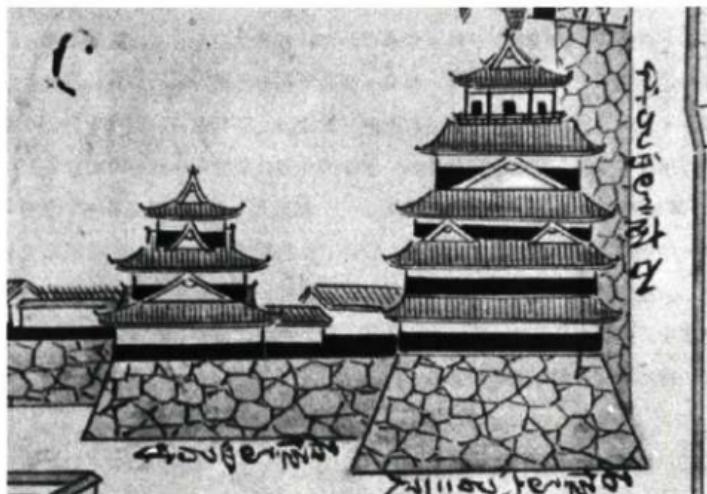
東表門裏門之間

堀長 四拾八間

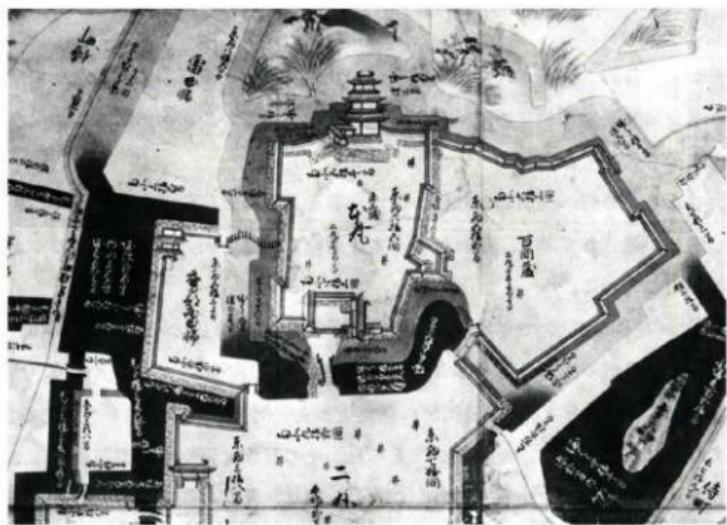
東裏門より長屋迄

堀長 五拾四間

此より南角櫓迄打廻 (以下略)



〔図4-1〕国立公文書館内閣文庫蔵「安英國広島城所繪図」



〔図4-2〕国立公文書館内閣文庫蔵「相模国小田原城繪図」部分

のごとき書式で、城および城下全域にわたって記す。そして、天守・櫓・門等の建築規模でも、平面寸尺・軒高・棟高等迄の詳細が求められ、石垣も上端長・地付長・高さ等が記録された例（松坂城）等もある。堀はもとより井戸の指渡し寸法、深さ迄実測され、城絵図作製の原簿とされたのである。

「城絵図」は、上記の実測資料をもとに、絵図化したのであるから、天守・櫓・門等が石垣をふくめて立面図を投影した状態で描く。また起絵図風でもあり、屋根層數・破風形状・壁仕様等が具体的に知られて確かである。その程度を、例えば広島城の場合でいえば、戦災焼失迄現存した遺構と全く矛盾ない程に様式表現が適確である。〔図4-1〕

(2) 提出年時・枚数

国立公文書館内閣文庫蔵『重訂御書籍來歴志』によると、

正保元年十一月諸州入旨アリテ国郡及び諸城ノ図ヲ修撰令シメラル。井上筑後守重政等奉行タリ。又別ニ賦役ヲ附セシム。明曆中御庫ニ収ム。
とされている。

かくて幕府へ提出された「正保城絵図」は、幕府正庫紅葉山文庫をへて今日国立公文書館内閣文庫に保存されているのであるが、明治維新時にかなりの枚数を失っている。

しかし、幕府へ提出した絵図の他で、各藩調製時で「下絵図」ないしは「控絵図」が遺されており、それ等の写本を含めて内容を検討すると、次のことが判明している。

① 「正保城絵図」で年紀があるのは、内題で徳島城下図の正保3年(1646)、外題で桑名城下図の承応3年(1654)のみである。下絵図では、犬山城下図の外題に慶安2年(1649)提出後に調査を加え、同5年に再提出したとある。また高知城下図では、控絵図が伝えられ、その覚書に慶安4年調製後補加をして翌5年提出しているとある。こうした例は、幕府の調査規準によって修正を命ぜられた結果と推され、その内容にかなりの精度が求められた傍証と

なる。

② 「正保城絵図」の提出年代は、会津城下図の正保3年（1646）8月を上限とし、正保3～4年が多く、桑名城下図の承応3年（1654）を下限とする。したがって幕府書庫に収めたとする先記『重訂御書籍来歴志』の「明暦年中」（1655～1658）と矛盾するものでない。

③ その際の総枚数は明らかでないが、現内閣文庫蔵本の外題部分の朱番号によると、その最終番は肥後国八代の「百五十三」であり、続く日向国・薩摩国の「正保城絵図」を加えたことを想定すると、およそ160枚程度と推定される。文化5年（1808）より文政2年（1819）迄幕府御文庫奉行職にあつた近藤守重の記録（『元治増補御書籍目録』）によると157枚とあるのは、この際参考になろう。なお、内閣文庫に現存するのは63枚で、筆者の調査による各藩の下絵図・控絵図・写絵図それに明治維新時の流出絵図を加えると、80枚以上が現在知られている。

（3）表現内容

上記で知られる80枚余の「正保城絵図」の内容を検討すると、もとより幕府の調製規準にそるものであるが、以下具体的にその特質を列記する。

① 縮尺：「正保城絵図」の法量は、400cm×500cmにおよぶ大絵図（高取537.0cm×425.0cm）もあるが、一般的には150cm×250cm程で、小さい例では萩の133.0cm×145.0cmがある。よってその縮尺は、1/700～1/2000程度であると概略いえるが、城の内郭部は拡大され、逆に城下町部は縮少ぎみで、周辺におよぶ程その縮少率は大きく、さらに町外の川・山等は模式的表現をとる。

② 彩色：一般的に道路を黄土（中心線に朱を入れることが定則）、山・樹木・水を岩緑青ないしは岩群青、石垣・建築等は墨線に茶の濃淡を加え、概して写実的彩色をとる。

③ 記入寸法：内郭部・城下町部・周辺部に3分して、記入寸法が認めら

れる。内郭部は極めて正確で、先述調製規準に従う建築の平面規模・高さ・深さが間数で示されている。これに対し城下町部は、侍屋敷・町屋敷の道路長間数が主であり、周辺部に至っては、城との距離と高さの概記にとどまるが、時に川巾・池深さの記入もある。

④ 名称：武家・町人・寺社とも個有名称の記入はないのが原則である。「侍屋敷」「町屋敷」「寺」「寺町」「寺屋敷」「宮」の概称にとどまる。

⑤ 建築：描写は内郭部に限られるのが原則である。特に天守・櫓・門・堀は適確で、殿舎・番所・井戸を描く場合も多い。それも屋根形式・同層数・同仕様（瓦葺・桧皮葺・柿葺等）・壁仕様（白壁・板張等）が明確で、時に格子・狹間等の窓仕様迄認められる。対して城下町部では、例外的に寺社を描くが、模式的である。

⑥ 道路：絵図の調整条項に「一、本道ハふとく、わき道ハ細ク、朱ニ而いたすべき事」（『忠宗君記録印象記』国立公文書館内閣文庫蔵）とあるごとく、道路幅は、本道・脇道が類別され、朱の道路中心線を入れて、城下から城内への正道が明示されている。

以上の「正保城絵図」仕様をみると、横須賀城下町図第Ⅰ類は、特に建築の表現法・道路状態の表示が一致している。寸法の記入はないものの、内郭部は拡大して描かれ、城下町部と比べ、建築様式の具体的表現が著しいことは、すでに前節で指摘した。

さらに「正保城絵図」との関連を見るとき、横須賀城下町第Ⅰ類以上に、同内郭図第Ⅰ類も注目される。やはり天守が4層単立式に描かれ、本丸御殿や二階門、三丸の太鼓櫓や東大手門、さらには二丸二大手門・揚手門などが、城下町図第Ⅰ類とよく照応し、しかもより詳細である。

中でも国会図書館蔵「遠州横須賀城図」〔口絵2〕〔図2-1〕は、最も良質で、天守等の内郭部建築の描写に「正保城絵図」同様の斜投影手法が認められ、切妻・入母屋の屋根形式、瓦葺・柿葺の仕上区分、柱型・窓等の壁仕様が明らかで、さらに土塁・石塁、それに「侍屋舎」「から掘」等の名称が

あって、幕府指示による実測調査結果の反映を読み取れる。

この図は、第2章でも紹介したように、元来は稻垣家で集成した城絵図であり、346枚一組として国会図書館の前身旧上野図書館へ昭和26年3月26日納入されている。その際に仮称したのが『(日本古城絵図)』で史料本来の名称ではない。346枚の物件は、五畿七道の日本全国城下における、名称からして江戸中期の編成になる兵学書『主圖合結記』の類と似た史料に誤解され易いが、絵図そのものの描写内容は大きく異なり、より詳細である。むしろ上記幕府指示による「正保城絵図」仕様に準ずる点が多くみられる。例えば、「相州小田原城図」は、現国立公文書館内閣文庫蔵『相模国小田原城絵図』〔図4-2〕と内郭部を同内容にて伝えている。

稻垣家とは、同館に2年後に納入されている『鳥羽城^(ヤマ)廊古図』で「公儀江指上ヶ候絵図之留 寛文十年庚戌九月八日土屋但馬守御月番ニ付持參仕候」とて著名する「寛文十年稻垣信濃守」の家系で、明暦元年12月29日従五位信濃守に任せられている(『寛政重修諸家譜』)。二条関白持通公筆の『伊勢物語』を献した程の古典集成に通じた家柄と推され、本古城図も、そうした関心があったためか『主圖合結記』とは数等に高質な城絵図で、特に「正保城絵図」関係史料を、少なくとも幕閣レベルで集成できた結果と考えられる。

要するに横須賀城下町図第I類、わけても最も原本に近いとみなされる阿部俊夫氏蔵『横須賀城井家中絵図』、それに内郭図第I類特に国会図書館蔵『遠州横須賀城図』は同内容にして同時期のものと考定される。両者共に幕府の「正保城絵図」仕様によって作図された蓋然性を指摘でき、史料的信憑度は極めて高い。

4-3 内郭建築の種類

面積率が10.7%と著しく高い内郭部には、本丸の中核で第I期・第II期以

來の伝統を遺しながら、少くとも第III期以降、新しく二丸に御殿を建てて、新時代の建築様式（敷寄屋造を加味した書院造）を導入したものと思われる。江戸城における二丸庭園の拡充、仙台城や名古屋城、それに金沢城等それこそ枚挙にいとまない程に、寛永期以降本丸の形式化と裏腹に、二丸御殿の本邸化が指摘される。当横須賀城も、5万石の大名の格をもって、最新の二丸御殿を、風流大名として知られる本多利長の時代に整えたものと推定される。

その建築の全容は必ずしも明らかでないが、第2章で紹介した各種史料で、かなり記録されている。最終的には、明治元年（1868）西尾忠篤が安房国花房に移封されるにあたっての大須賀町藤「西尾隱岐守財産調出控」と題される一類史類中に『鍵帳』があり、少なくとも明治2年3月現在次の諸建築が存在したことが確められる。

覚

| | | |
|-------------------|------|---|
| 一、追手門鍵 | 内壺潜鍵 | 貳 |
| 一、東門鍵 | 内壺潜鍵 | 貳 |
| 一、表門鍵 | 内壺潜鍵 | 貳 |
| 一、裏門鍵 | 内壺潜鍵 | 貳 |
| 一、御朱印蔵鍵 | | 壱 |
| 一、武器蔵鍵 | | 壱 |
| 一、本丸門鍵 | 内壺潜鍵 | 貳 |
| 一、城詰米蔵門鍵 | 内壺潜鍵 | 貳 |
| 一、同所西門鍵 | | 壱 |
| 一、城詰米蔵鍵 但壱番より六番まで | | 六 |
| 一、不明門鍵 | 内壺潜鍵 | 貳 |
| 一、山之手門鍵 | 内壺潜鍵 | 貳 |
| 一、二階門鍵 | 内壺潜鍵 | 貳 |
| 一、天守鍵 | | 壱 |
| 一、天守門鍵 | 内壺潜鍵 | 貳 |

| | | |
|---------------|------|---|
| 一、帶曲輪門鍵 | | 壱 |
| 一、奥門鍵 | 内壠潜鍵 | 貳 |
| 一、東仕切門鍵 | 内壠潜鍵 | 貳 |
| 一、広間屏入口鍵 | | 壱 |
| 一、書院庭口鍵 | | 壱 |
| 一、台所脇路次口鍵 | | 壱 |
| 一、三之丸入口屏重門鍵 | | 壱 |
| 一、湯殿入口鍵 | | 壱 |
| 一、居間庭口鍵 | | 壱 |
| 一、天守裏攝水門鍵 | | 壱 |
| 一、三之丸東櫓水門鍵 | | 壱 |
| 一、西入江水門鍵 | | 壱 |
| 一、中入江水門鍵 | | 壱 |
| 一、東入江水門鍵 | | 壱 |
| 一、居間西庭口鍵 | | 壱 |
| 一、渡廊下庭口鍵 | | 壱 |
| 一、三之丸竹木戸鍵 | | 壱 |
| 一、西曲輪屏重門鍵 | 内壠潜鍵 | 貳 |
| 一、五岳之間裏板羽目入口鍵 | | 壱 |
| 一、同所西入口鍵 | | 壱 |
| 一、居間庭口胎内潜鍵 | | 壱 |
| 一、居間裏入口鍵 | | 壱 |
| 一、城詰米藏西櫓水門鍵 | | 壱 |
| 一、同所東櫓木戸鍵 | | 壱 |
| 一、同所中屏水門鍵 | | 壱 |
| 一、不明門木戸鍵 | 内壠潜鍵 | 貳 |
| 一、石津東木戸井土藏鍵 | 内壠潜鍵 | 三 |

| | | |
|------------|------|---|
| 一、会所門鍵 | 内壜潜鍵 | 貳 |
| 一、同所東入口鍵 | | 壱 |
| 一、下台所門鍵 | 内壜潜鍵 | 貳 |
| 一、作事門鍵 | 内壜潜鍵 | 貳 |
| 一、焰硝藏鍵 | | |
| 一、拾六軒町木戸鍵 | 内壜潜鍵 | 貳 |
| 一、石津西木戸鍵 | 内壜潜鍵 | 貳 |
| 一、北之丸櫻木門鍵 | | 壱 |
| 一、坂下谷口木戸鍵 | 内壜潜鍵 | 貳 |
| 一、坂下谷奥竹木戸鍵 | | 壱 |
| 一、製薬所鍵 | | 壱 |
| 一、奥庭口羽目入口鍵 | | 壱 |
| 一、町番所木戸鍵 | 内壜潜鍵 | 貳 |
| 一、稽古場鍵 | | 壱 |
| 一、製薬所門鍵 | 内壜潜鍵 | 貳 |

右之通御座候、以上

西尾隱岐守家来

巳三月 監察

鳥居弥吉印

岡田勝治印

鈴木六蔵印

さらに、明治6年(1873)正月18日民間に払下げられた際の大須賀町蔵「横須賀城払下げ入札記録」もある。

(前略) 記 立木之部

| | |
|---------------|-------|
| 一、二階門より中仕切門迄 | 土居松立木 |
| 一、中仕切門より西大手門迄 | 同断 |
| 一、西大手門より不明門迄 | 同断 |

- 一、孟宗竹藪構内 立木竹共
- 一、本丸門・天守臺・米蔵 回り立木
石垣の部
- 一、大手門より太鼓櫓下通り 石垣惣体
- 一、本丸門左右 石垣
- 一、同内天守臺回り 石垣
- 一、西大手門よりニノ丸玄関迄 石垣惣体
- 建物之部
- 一、壱番 大手門
- 一、貳番 太鼓櫓
- 一、三番 二階門
- 一、四番 天守門
- 一、五番 本丸門
- 一、六番 天守臺上之門
- 一、七番 天守
- 一、八番 米蔵
- 一、九番 同
- 一、拾番 同
- 一、拾壱番 同
- 一、十二番 米蔵見張門
- 一、十三番 同入口門
- 一、十四番 中仕切門
- 一、十五番 裏門
- 但し是者左右長屋ヲ除キ切取跡ハ中方見込入札之事
- 一、十七番 朱印蔵
- 一、十八番 武器蔵
- 一、十九番 西大手門

一、二十番 不明門

二丸建物

一、い印 玄関書院向

一、ろ印 奧座敷向

一、は印 部屋向

一、に印 長局共

一、ほ印 元豪所向

一、へ印 孟宗蔵門

一、と印 天守臺ノ米蔵之間門

一、ち印 大手門・米蔵壇棟

一、り印 同東ノ方壇棟

一、二丸内

一、疊

一、障子襖共

右落札相達次第代金上納之上引取之儀者其節日限相達候事

西一月十八日

御書付

元城内二ノ丸建物附疊障子襖共入札之上御拂下相成候条得其意届之もの今十九日第十二時迄同所江罷出其場ニ而速ニ入札い多し候様可相触候也

一月十九日

出納課 長谷川時彦

山口信義

記

番外 一、西大手門外石垣 惣体

番外 一、石津門 一、二丸玄関左右土塀

右之分も入札之上御拂下ヶ相成候条届之もの有之候ハ入札可致旨追達可致候尤入札日限之儀者惣体休來ル廿二日中迄ニ□□戸籍調査可届出旨可

相達候也

明治六年一月十九日

出納課 長谷川時彦

山口信義

現在史跡に指定整備されている本丸・西丸・三丸部の旧梯郭式繩張部分に限定しても、大手門・太鼓櫓・二階門・天守門・本丸門・天守台上之門・天守があり、関連して米蔵・米蔵見張門・米蔵入口門・中仕切門・裏門と二丸へ続いていたことが明らかである。

これ等は、先節で考察して信憑性が高い横須賀城内郭図第Ⅰ類や城下町図第Ⅰ類にもおよそ相当するものを認めることができ、大様において第Ⅲ期以降の建築と考えてよからうが、特に内郭図第Ⅱ類の国会図書館蔵「遠州横須賀城図」〔図2-2〕によって、東大手門（枱形前門たる高麗門を含む）・二階門・本丸門・中仕切門・米蔵入口門・同見張門・天守門・裏門の柱建状態が知られ、復元的考察にあたって貴重である。

そこで、以下に建築様式が具体的に分析できる天守および大手門について節を別けて考察する。

4-4 天守

改めるまでもなく、「天守は一城の飾り」であり、城下町のランドマークとして景観上不可欠の建築である。それだけに、すでに軍事性を全く失った江戸時代においてさえ、城下からの遠望にたえるべき単立式層塔型天守が、例えば、宇和島城天守（外観3層内郭3階、寛文5年＝1665）、丸亀城天守（外観3層内郭3階、江戸初期）、備中松山城天守（外観2層内部2階、天和期＝1683頃）、弘前城天守（外観3層内部3階、文化7年＝1810）、松山城天守（外観3層内部3階、安政元年＝1854頃）等、それこそ全国各地に建立されたのである。



〔図4-3〕平成2年3月天守台跡発掘調査南側根石部分



〔図4-4〕旧見付学校校舎石垣（明治8年）

大須賀城天守も同様で、『横須賀三社縁起私記』で伝えるごとく第Ⅰ期に創建されたとしても、単立式層塔型の様式からして、少なくとも本丸を中心とした梯郭式部分が整備された第Ⅱ期の正保年間迄には何らかの修理再築された可能性を考えるべきで、その結果が諸史料に記録されたものと考えられる。

以下その復元的考察をおこなう。

(1) 天守台の規模・型式

天守台の規模は、旧陸軍省築城部本部の調査による国会図書館蔵「横須賀城」（『日本城郭史料第17冊遠江国』所収）で記録している。この史料は、もとより近代測量技術による1/1000の実測図だけにかなりの精度が認められる。〔図2-6・7〕で明らかのように、大手筋の南側より梯郭状に北方へ登りつめたところにある天守台は、東西12.5m×南北8.5mの矩形平面で描かれる。注目すべきは高さの記入で、北丸より+9.0m高とされる。現状遺跡にある本丸北側に続く土壘（旧忠靈殿建立の際東半分が欠）頂点の標高23.0mと北丸の標高14.3mの差は8.7mであり、単に計測点の差と認められる程度の精度を確認できる。すなわち、この本丸北側に続く土壘上から僅か1m未満の高さに、天守台石垣上部が位置したわけであろう。それから南側に「-3.0m」、すなわち下って本丸地表があり、したがって天守台石垣高さ10.00尺となる。

これ等の位置関係は、平成2年3月の発掘調査によても確認されている。〔付図1〕旧忠靈殿の南北および直交する東西中心線上に設定したトレントで、旧石垣南側根石相当石が標高21.0mにて、また東側根石相当石が標高21.3mにて、東側根石相当石が、それぞれ発見されている。〔図4-3〕

石垣に使用された石材は、通常城郭石壘にみる切石・割石の類ではなく、いわゆる丸石の類で、当遺跡で発見されているやや大ぶり（約径1.5尺程）の河原石である。その石垣転用例に旧見付学校校舎（明治8年建立）石垣があり、この際参考になる。〔図4-4〕

(2) 天守の平面

天守台石垣上端が東西12.5m×南北8.5m 程であることは、単立式天守の規模として、最小の部類に属しよう。〔表4-2〕は現存する3層天守ないしは櫓を調査して、その規模を一覧表にまとめたものである。そこで判明することは、1階平面が、1間=6.50尺(京間)にて(以下特記なき限り京間)、梁間4間が最小であり、当天守台寸法からして、横須賀城天守1階梁間4間=26.00尺=7.88m が選ばれる(柱寸法に壁塗分を含めて約1.5尺=0.45m を加えると8.33m 程になり、実測値8.5m に相応する)。

次に桁行寸法であるが、実測値12.5m は、6間余りになり、4間梁間の寸法からして大に過ぎる。最大級の松山城天守の桁行9間の場合、梁間7.5間である。桁行4間の例では彦根城西丸3層櫓が梁間5間、明石城巽櫓が梁間4.6間であるので、5間程度が、とりあえずの常規寸法といえる。

しかしながら、先節にて紹介した明治5年払下げ時の入札記録に、「天守台上之門」が「天守」とともに存在したことが明らかである。わざわざ「天守台上之門」というからには、天守に直接出入するためのいわゆる登闇門であろう。その位置は、先掲史料によって東・南側になく、また北側は北丸側の断崖がある以上、西側以外に考えられない。天守台上端東西実測値12.5m に照応する最大桁行柱間数は、6間=39.00尺=11.82m であるので、登闇門桁行1間をとれば、天守桁行は5間となる。要するに、天守1階平面規模は(東西)5間×梁間(南北)4間となる。

天守上階の平面寸法はとりあえず不詳である。しかし、単立式層塔型様式は、平面縮減率が一定であるので考定は可能で、それは外観の分析結果によって改めて考察する。

(3) 天守の外観

天守の外観を示す良質の史料は、すでに先節で考察したごとく、横須賀城

〔表4-2〕3層層塔型天守・複数棟比較

注：1) 通常作代碼完成詞。

3) 「坪」は京韻坪(4.59)

© 2000 by the American Psychological Association or the National Council on Measurement in Education.

4) 厚紙勾配と地盤太勾配。野根根の場合は [] 内に引
き出された土木、[] 土は常に傾く、他の問題も
同様である。

52 本項は賃料上積み又は賃料下積みの付添。 53 賃料上積みの付添。

5) *は團體・指団からの権利値。 から團上

限定。よって床面積と必ずしも一致しない。

过高。但上“如是上路在而休的想以之，他

方向。壁と天井上部に穴が無いので、最高床までの寸法。

中醫學

九章



〔図4-5〕弘前城天守外観



〔図4-6〕福山城伏見櫓外観

内郭図第Ⅰ類の国会図書館蔵「遠州横須賀城図」である。幕府の「正保城絵図」仕様に準じた描法であるだけに信憑性が高いことは、すでに検討済みである。

それによると、外観4層で、隅に柱型をだす壁仕様で東面1層部に切妻破風、南面1・2層部に上下2連の切妻破風を飾り、弘前城天守〔図4-4〕同様の城下遠望にたえる華麗な装飾性をもつ。この史料表現の具体描写は、同じ「正保城絵図」仕様の城下町図第Ⅰ類では、相応して4層に描かれて矛盾ないが、後世の写本ないしは、もともと建築様式の厳密性を求めるなくして模式的表現に終始した兵学図では3層例が多い。それで従来横須賀天守3層説、4層説か混在したわけであるが、少なくとも史料の信憑性を検討すれば、3層説は否定せざるを得ない。ただ内郭図第Ⅲ類天理図書館蔵「遠州横須^(マ)加」によれば、外観3層に描きながら、あえて「天守四重」の付記がある。〔図2-3〕上述第Ⅰ類に従う4層の意味に関連して考えれば、現実4層の外観をとりながら、建て前として3層形式が考えられてくる。この建て前は、明暦大火災後、幕府の本営の江戸城でさえも天守再建をせず、したがって地方城郭では、幕府に遠慮して3層以上の天守を造らない時代的動向による。この件は、外様大名の金沢城はもとより、御三家の水戸城、それに徳川家一統の旗本大名城下では、とりわけ重要な意味をもつ。

そこで、改めて天守1階平面規模から念のため層数を検討してみよう。

〔表4-3〕は、〔表4-2〕の遺構調査データにより、3層層塔型天守・櫓の構造矩体平面規模による側柱筋軒高・階高と桁行長・梁間長を一覧表にまとめたものである。これをもとに〔表4-4〕は、1層と最上層（3層）との軒高差=A・同階高差=Bを求め、さらに桁行長差/2=C・梁間長差/2=D、すなわち天守の構成骨格を定めている矩体構造における棟真よりの平面規模から、側柱筋における軒高減率A/C・A/Dと階高減率B/C・B/Dを計算したものである。

これによると、望楼型は元来に持つ構造特質として、下層の矩体が上層の

(表4-3) 3層層塔型天守・櫓側柱筋軒高・階高と桁行長・梁間長比較
単位: 尺

| 城名 | 層 | 軒高 | 桁行長/2 | 梁間長/2 | 階 | 階高 | 桁行長/2 | 梁間長/2 |
|--|----|-------|-------|-------|-----|--------|-------|-------|
| 彦根城西丸三層櫓 慶長末年造営 (1610頃) | 3層 | 29.50 | 11.00 | 7.75 | 3階 | 21.75 | 11.00 | 7.75 |
| | 2層 | 20.35 | 13.00 | 9.75 | 2階 | 12.35 | 13.00 | 9.75 |
| | 1層 | 10.40 | 16.25 | 13.00 | 1階 | 1.80 | 16.25 | 13.00 |
| 橿須賀城天守 慶長末年~正保頃 (1610~45頃) 造宮改修 | 3層 | 36.50 | 11.00 | 7.75 | 3階 | 28.85 | 11.00 | 7.75 |
| | 2層 | 27.40 | 13.00 | 9.75 | 2階 | 19.40 | 13.00 | 9.75 |
| | 1層 | 17.40 | 16.25 | 13.00 | 中2階 | 8.90 | 16.25 | 13.00 |
| | 雪打 | 10.40 | 16.25 | 13.00 | 1階 | 1.00 | 16.25 | 13.00 |
| 名古屋城西北隅櫓 元和5年造宮 (1619) | 3層 | 37.27 | 17.91 | 14.66 | 3階 | 27.86 | 17.91 | 14.66 |
| | 2層 | 25.02 | 22.75 | 19.50 | 2階 | 15.18 | 22.75 | 19.50 |
| | 1層 | 12.86 | 26.46 | 22.75 | 1階 | 2.08 | 26.46 | 22.75 |
| 明石城坤櫓 元和5年頃造宮 (1619頃) | 3層 | 36.26 | 11.58 | 8.63 | 3階 | 25.46 | 11.58 | 8.63 |
| | 2層 | 24.36 | 15.00 | 12.05 | 2階 | 12.96 | 15.00 | 12.05 |
| | 1層 | 12.36 | 18.05 | 15.10 | 1階 | 0.86 | 18.05 | 15.10 |
| 明石城巽櫓 元和5年頃造宮 (1619頃) | 3層 | 33.64 | 9.15 | 7.25 | 3階 | 24.30 | 9.15 | 7.25 |
| | 2層 | 22.70 | 11.90 | 10.00 | 2階 | 13.20 | 11.90 | 10.00 |
| | 1層 | 11.45 | 14.90 | 13.00 | 1階 | 1.00 | 14.90 | 13.00 |
| 宇和島城天守 寛文5年造宮 (1665) | 3層 | 38.08 | 12.07 | 12.07 | 3階 | 29.14 | 12.07 | 12.07 |
| | 2層 | 27.08 | 15.61 | 15.61 | 2階 | 17.86 | 15.61 | 15.61 |
| | 1層 | 16.15 | 19.50 | 19.50 | 1階 | 2.48 | 19.50 | 19.50 |
| 高松城月見櫓 延宝4年造宮 (1676) | 3層 | 35.20 | 9.72 | 9.72 | 3階 | 26.63 | 9.72 | 9.72 |
| | 2層 | 23.73 | 12.96 | 12.96 | 2階 | 14.60 | 12.96 | 12.96 |
| | 1層 | 11.84 | 16.35 | 16.35 | 1階 | 0.96 | 16.35 | 16.35 |
| 高松城艮櫓 延宝4年造宮 (1676) | 3層 | 31.34 | 9.45 | 9.45 | 3階 | 20.97 | 9.45 | 9.45 |
| | 2層 | 22.48 | 12.60 | 12.60 | 2階 | 12.54 | 12.60 | 12.60 |
| | 1層 | 11.97 | 16.60 | 16.60 | 1階 | 0.86 | 16.60 | 16.60 |
| 弘前城天守 文化7年造宮 (1810) | 3層 | 36.41 | 13.00 | 9.75 | 3階 | 27.10 | 13.00 | 9.75 |
| | 2層 | 23.94 | 16.25 | 13.00 | 2階 | 14.30 | 16.25 | 13.00 |
| | 1層 | 11.25 | 19.50 | 16.25 | 1階 | 1.00 | 19.50 | 16.25 |
| 松山城天守 安政元年造宮 (1854) | 3層 | 40.06 | 19.53 | 14.83 | 3階 | 30.41 | 19.53 | 14.63 |
| | 2層 | 27.14 | 24.35 | 19.45 | 2階 | 16.85 | 24.35 | 19.45 |
| | 1層 | 13.20 | 29.17 | 24.27 | 1階 | 1.21 | 29.17 | 24.27 |
| | | | | | 地階 | -13.15 | 17.71 | 12.87 |

注：1) 高さ関係寸法は天守台石垣上端を±0とする。
2) 桁行長・梁間長は構造矩体寸法。

〔表4-4〕3層層塔型天守・櫓の通減率比較

| 天守名 | 軒高差/A | 棟高差/B | 桁行高差/C | (A/C) | (B/C) | 梁間高差/D | (A/D) | (B/D) |
|--------------|------------------|-------------------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|
| 彦根城西丸 二層櫓 | 19.20尺 (3~1階) | 19.35尺 (3~1階) | 3.25尺 | (1.64) | (1.88) | 3.25尺 | (1.66) | (1.88) |
| 横須賀城 天守 | 19.20尺 (3~1階) | 19.32尺 (3~中1階) | 3.25尺 | (1.64) | (1.88) | 3.25尺 | (1.66) | (1.88) |
| 名古屋城 西北隅櫓 | 24.41尺 (3~1階) | 25.78尺 (3~1階) | 3.55尺 | (2.85) | (2.01) | 3.68尺 | (1.02) | (1.19) |
| 明石城坤櫓 | 21.90尺 (3~1階) | 24.40尺 (3~1階) | 3.47尺 | (1.55) | (1.88) | 3.47尺 | (1.55) | (1.88) |
| 明石城巽櫓 | 21.19尺 (3~1階) | 23.36尺 (3~1階) | 3.15尺 | (3.66) | (4.05) | 3.15尺 | (1.86) | (4.05) |
| 宇和島城 天守 | 21.93尺 (3~1階) | 25.64尺 (3~1階) | 3.43尺 | (2.05) | (1.59) | 3.43尺 | (1.93) | (1.59) |
| 高松城 月見櫓 | 21.26尺 (3~1階) | 25.57尺 (3~1階) | 3.43尺 | (3.52) | (1.87) | 3.43尺 | (1.52) | (1.87) |
| 高松城巽櫓 | 19.37尺 (3~1階) | 22.11尺 (3~1階) | 3.15尺 | (2.11) | (2.81) | 3.15尺 | (1.71) | (2.81) |
| 弘前城天守 | 21.16尺 (3~1階) | 21.10尺 (3~1階) | 3.10尺 | (3.57) | (4.02) | 3.10尺 | (1.85) | (4.02) |
| 松山城天守 | 26.88尺 (3~1階) | 33.20尺 (1~1階) | 3.64尺 | (2.79) | (3.03) | 3.84尺 | (1.75) | (3.03) |

それと関連なく乗せているため、外観に統一制がなく、よって C>D で、当然にして A/C<A/D、B/C<B/D となる。これに対して、下層矩体構造が上層のそれと一体化して塔状に設計された層塔型は C=D となり、よって A/C=A/D、B/C=B/D になる。名古屋城西北隅櫓は、旧清洲城小天守の移建再築のため、その構体構造が望楼型にて C=8.55尺>D=8.09尺で、よって桁行より梁間通減率が大きく、すなわち A/C=2.85<A/D=3.02、B/C=3.02<B/D=3.19 となり、他の層塔型と根本的に異なっている。

この望楼型から層塔型への変化は、慶長後半期に生じており、例えば、安土城天守（天正7年=1579）・岡山城天守（慶長2年=1597）・松本城天守（慶長2年）、福井城天守（慶長11年）、松江城天守（慶長12年～16年）・駿府城天守（慶長13年）、姫路城天守（慶長14年）は望楼型であって、すべて C>D となる。そして名古屋城天守（慶長17年）から層塔型になって C=D となり、以後二条城天守（寛永3年）、大阪城天守（寛永3年）・江戸城天守（寛永15年）

等はすべて桁行・梁間通減率が統一されてしまうのである。

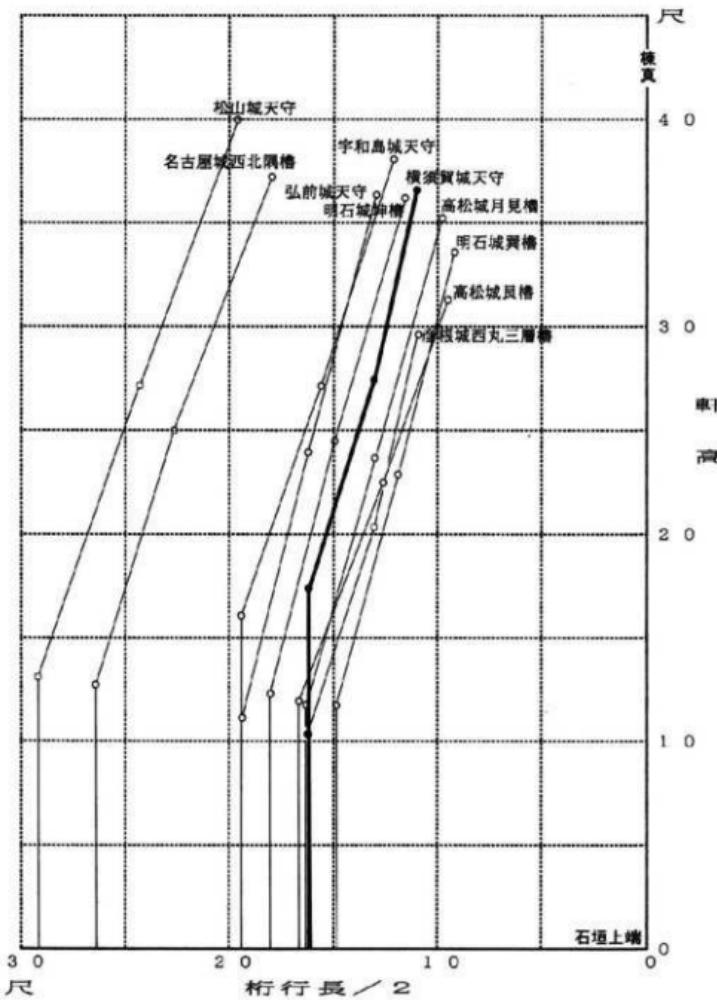
さて、以上の建築様式の歴史的変遷過程において、横須賀城天守1階平面4間×5間は、3ないし4層層塔型天守レベルでは最小ともいえる規模である。3層櫓と比べても、横須賀城天守より僅かに小規模な明石城巽櫓が例外的に存在する程度であり、同一規模では、彦根城西丸三層櫓を例示できるにとどまる。やや大きいものに明石城坤櫓4.6間×5.6間があっても、やはり例外的部類に属し、一般に3層天守・櫓は5間以上の梁間長をもつのが常規である。もとより桁行長は、それ以上になる。

次に最上層の矩形平面規模を検討すると、もともと5層望楼型天守における3間×3間から発達してきた部分であるだけに、梁間長3間を最小とする。ただ3層天守・櫓になると僅かに小規模のものもあるが、1層の矩形最小の明石城巽櫓でも最上層（第3層）は梁間長2.2間で、これを限度とする。

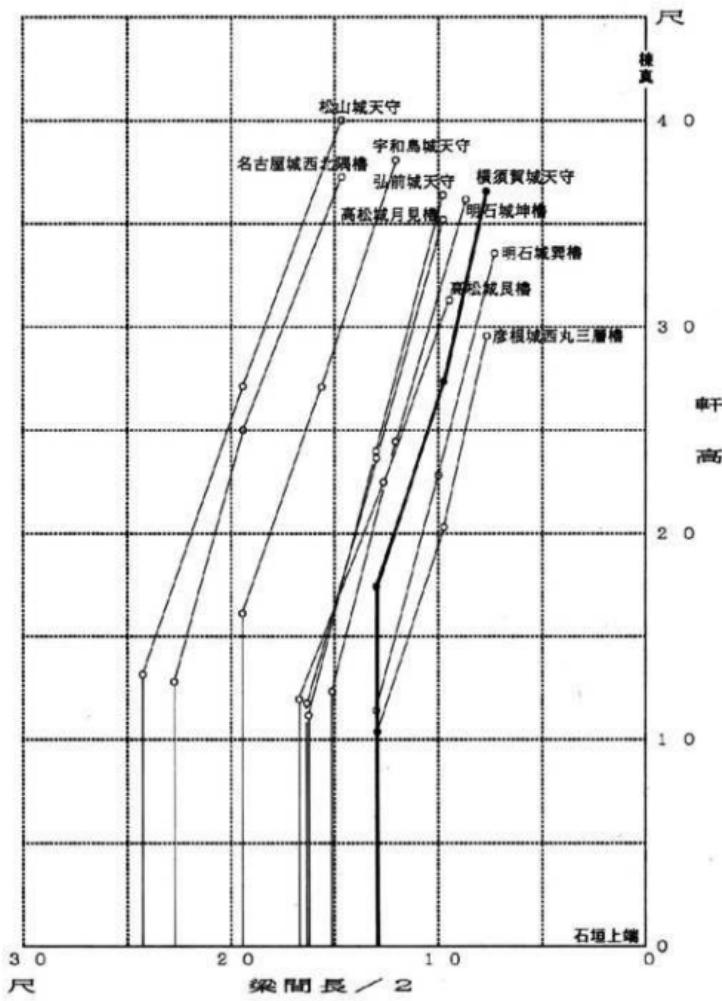
そこで、最下層と最上層の桁行長差/2、同梁間長差/2を、両者の通減間数で考えるために調べると、3層構造の場合、彦根城西丸三層櫓5.25尺=0.80間を最小とする。比較のため、後期層塔型3層建築の通減間数を梁間長差/2にて例挙すれば、以下となる。

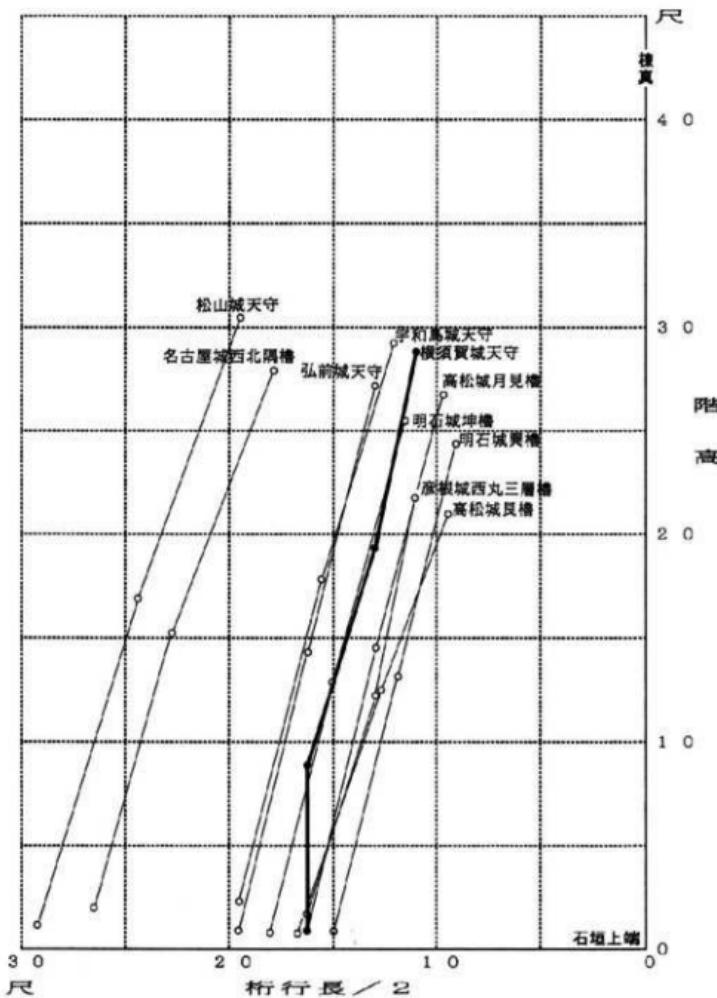
| 1層 | 2層 | 3層 | 総通減間数 | 平均通減間数 |
|--------------|---------|---------|-------|--------|
| 彦根城三層櫓：2.00間 | → 1.50間 | → 1.20間 | 0.80間 | 0.40間 |
| 明石城巽櫓：2.00間 | → 1.55間 | → 1.10間 | 0.90間 | 0.45間 |
| 明石城坤櫓：2.35間 | → 1.85間 | → 1.35間 | 1.00間 | 0.50間 |
| 高松城月見櫓：2.50間 | → 2.00間 | → 1.50間 | 1.00間 | 0.50間 |
| 高松城良櫓：2.65間 | → 2.00間 | → 1.50間 | 1.15間 | 0.57間 |
| 弘前城天守：2.50間 | → 2.00間 | → 1.50間 | 1.00間 | 0.50間 |
| 宇和島城天守：3.0間 | → 2.40間 | → 1.85間 | 1.15間 | 0.57間 |

注：層塔型の特色として桁行長/2の通減間数も同じあるので省略。

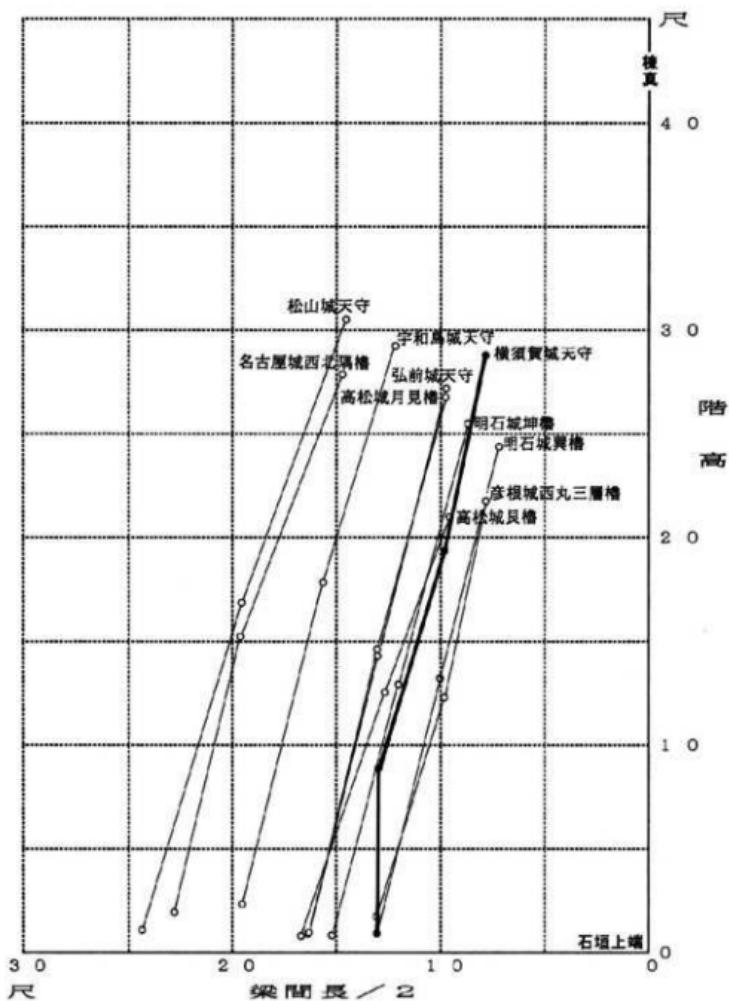


〔図4-7〕3層層塔型天守・櫓側柱筋軒高比較





(図4-8) 3層層塔型天守・櫓側柱筋階高比較



平均通減間数が0.50間に集中しているのは、後期層塔型は、耐震性に優れた互入式通柱構法をもって上下階（層）を一体化するためで、上層側柱を下層入側柱にする必要上、0.50間を大巾に割り込むことは、下層に半間以下の柱間が出来て構法上不可能となる。加えて、平面辺周部では柱間半間以上の柱が林立して空間の利用度が極度に落ちることにもなる。したがって0.40間以下の通減間数は、内部を使用しない塔ならばとにかく、天守・櫓ではあり得ない。

横須賀城天守の場合、最上階を明石城巽櫓の最小規模に従い、たとえば梁行長/2を1.1間として単純に後期層塔型の第1層から3段階に通減したとしても、平均通減間数は0.37間となる。したがって最上層では0.40間以下となるわけで、前例がないというだけでなく、互入式通柱構法そのものを不可能にする。結局、1層→2層→3層→4層でなく、1・2層同層→3層→4層と通減する構法と考えざるを得ない。横須賀城天守が第Ⅰ期に創設されたと考えられる歴史的の前期層塔型となるわけである。すなわち、1層屋根は前述したように各面中央に切妻破風の出窓突出部があり、一般にいう腰屋根に準じた雪打（差掛）となる。よって外観は4層にみえるが、厳密にいえば3重と考えられる建て前を幕府に対して通し得たものと判断される。ちょうど法隆寺五重塔初層下に裳階がつき計6層にみえる例、薬師寺東塔（3重）各層下にそれぞれ裳階がついて計6層にみえる事例等に類似している。この外観デザインの技巧性が、横須賀城天守史料に「四重」「三重」の混乱が生じたわけであろう。要するに建築構法からすれば、横須賀城天守はあくまで外観3層雪打（裳階）付で、結果として都合4層にみえると考えるべきである。

(4) 天守の高さ関係寸法

「天守台上之門」すなわち登閣門をもつ単立式外観3層雪打付層塔型天守の1層平面は4間×5間である。〔表4-2〕の規模比較表によって、最小の明石城巽櫓1層4.6間×4.0間の最上層矩体平面が2.8間×2.2間であることを

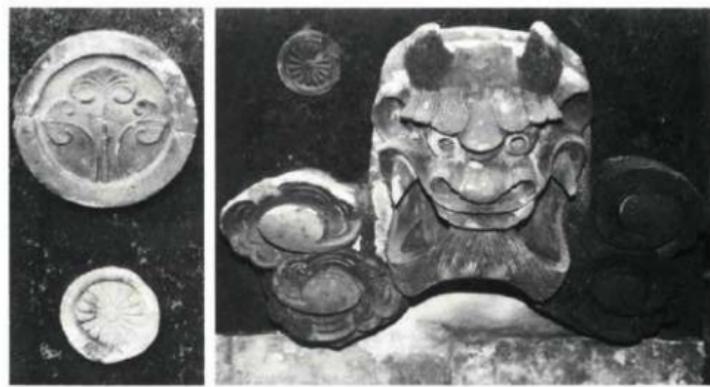
前提とすれば、それよりやや大きい横須賀城天守の場合、彦根城西丸三層櫓が直接のモデルになる。具体的には2層矩体平面は4.0間×3.0間、3層のそれは3.4間×2.4間の寸法を選ぶが最適である。その他、彦根城西丸三層櫓の木割には、横須賀城天守の設計寸法を検討する際、照応すべき様式要素を示す。

そこで、〔表4-3・4〕における構造矩体寸法として、側柱筋軒桁行長/2・梁間長/2より1層～3層の桁行長差/2=C・梁間長差/2=Dを算定すると、共に5.25尺となる。次いでA/C=A/D・B/C=B/Dを彦根城西丸三層櫓同一に見立てて、それぞれ3.66・3.80が選定される。横須賀城天守と比べ矩体構造平面がやや大きい明石城坤櫓のA/C=A/D=3.69・B/C=B/D=3.80と一致またはほぼ一致した数値であり、この選定の妥当性を示す。よって横須賀城天守のA・Bを計算すると、それぞれ19.20尺・19.95尺となる。

ここで留意すべきは、横須賀城天守の側柱筋1層軒下の雪打軒高である。先にモデルにした彦根城西丸三層櫓1層軒高と同じく10.40を考定し、なおかつその上に登閣門の桁行1間の差掛を1層軒下におさめるべく、7.00尺をとれば、都合1層軒高は、17.40尺となる。17.40尺に、先に算定した軒高差=A=19.20尺より最上層（3層）軒高=36.60尺が定まる。

最上層（3層）の矩体平面規模3.4間×2.4間程度の天守では、天井を張らなく、化粧屋根裏仕様にするのが一般である。よって前出3層軒高より7.75尺下りにて3階床高は28.85尺となる。これより先に算出したB=19.95尺下りで中2階高が定まり8.90尺となる。これはいわば、2階への梯子踏場に相当する構造と理解される。

以上の横須賀城天守高さ関係寸法の考定結果に加えて、1階床高、2階床高、3層軒高、大棟高等を総合した寸法体系を構造をふまえて技術的に検討し、すでに決められた諸値との木割関係にて算定したものを〔表4-2・3〕に示し、總体として〔図4-6・7〕で他城天守・櫓と比較している。建物高さは現明石城坤櫓とほとんど同じであるが、石垣高10.00尺を加えた總高は



[図4-9] 恩高寺藏伝横須賀城天守駒（上）・
鬼瓦（下右）・軒丸瓦・菊丸（下左）



(図4-10) 旧普門寺山門

弘前城天守〔図4-4〕より高く彦根城西丸三層櫓と同一である。最終的には、復元図巻末付図3~12を参照されたい。

(5) その他細部仕様

明治期の天守払下げ時に散逸した瓦等をふくめて、天守細部仕様を以下総括する。

まず壁仕様は、すでに指摘したようにもっとも信憑性の高い内郭図第1類国会図書館蔵「遠州横須賀城図」には柱型・地長押の描出がある。よって柱・長押型出大壁仕様と判定され、窓にも格子がなく、家康が好みの特に慶長度伏見城・同二条城・駿府城等にみられる御殿風デザインである。遺構には現福山城伏見櫓(伝伏見城移建)〔図4-5〕があるので、この際参考になろう。例えば姫路城にみるような軍事性を強調した無骨な大壁仕様と異なり、どちらかといえば住宅風の品格が認められる。

瓦(軒付瓦・丸瓦・菊瓦等)は、現天守台跡より発掘されており、また蟇・鬼瓦も城下河原崎恩高寺に保存されている(藤田清五郎著『横須賀城史談』

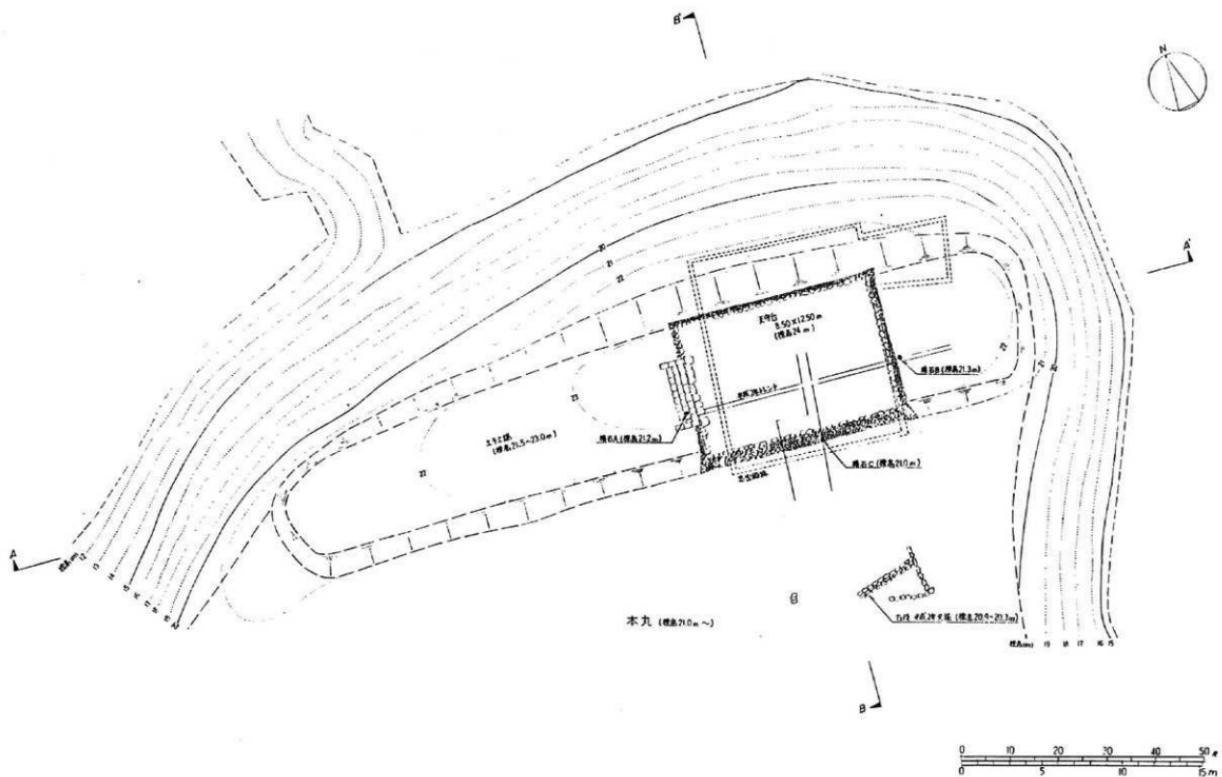
昭和42年刊、安本博編『遠江国横須賀城址調査報告書』昭和49年刊)。鯱には、安政3年(1856)内辰年三輪村瓦師山本塙左衛門の銘があり、また鬼瓦は、文政11年(1826)の銘がある。鯱の寸法は、鯱頸部基底にて2.29尺(0.69m)、高さ3.99尺(1.21m)であり、その大きさからして、伝のごとく天守大棟用のものとして適当である。また鬼瓦は踏足1.93尺(0.58m)で大棟用としては小さい。もとより創建当初のものではないが、絵様・縁形等の意匠は、復元の際、参考になる。[図4-8]

4-5 東大手枠形高麗門

天守同様明治期の払下げ物として、後世に伝わる建築には、撰要寺山門[図4-6]、本源寺山門等がある。

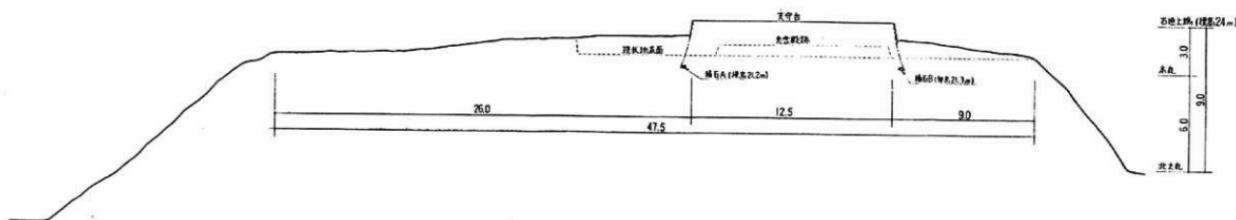
前者は、二丸北辺にあった不開門とも西大手門ともいいうが定かではない。二丸搦手門が別称不開門である。先掲内郭第II類国会図書館蔵「遠州横須賀城図」には、藩内郭内の柱位置が記入されていて、不開門は一間棟門と考定され、三間棟門の遺構と相応しない。その棟高の規模からして大手門級であるが、同図の西大手門は2間棟門(1間脇門付)となっており、やはり符合しない。東大手門とすると、3間棟門となり照応する。また後者は搦手門というが、上記撰要寺山門との混乱誤伝の場合が考えられる。

なお、昭和19年東南海大地震で倒壊した普門寺山門は、大(追)手門といわれる。1間間口の高麗門であることが写真で明らかで[図4-9]上掲史料によると、東大手門枠形の前門として同形式が認められる。いわゆる大手本門ではないが、横須賀城門として復元は可能で、巻末付図13、14に示す。



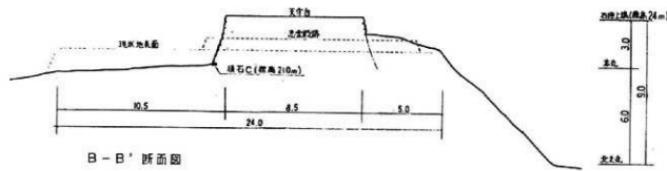
[付図 1] 横須賀城天守台復元配置図

標高(m)
25
24
23
22
21
20
19
18
17
16
15
14
13
12
11

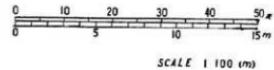


A - A' 断面図

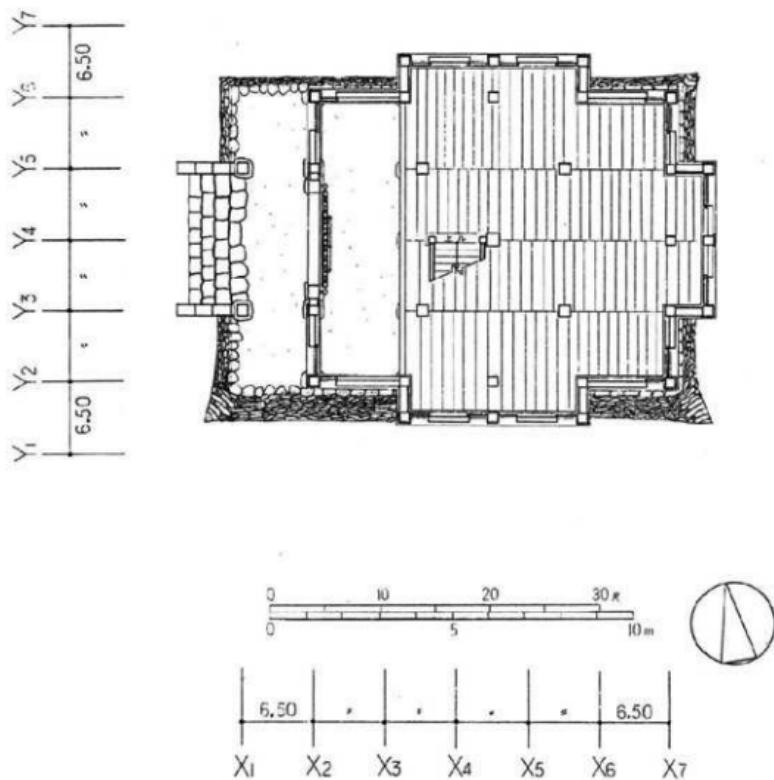
標高(m)
25
24
23
22
21
20
19
18
17
16
15



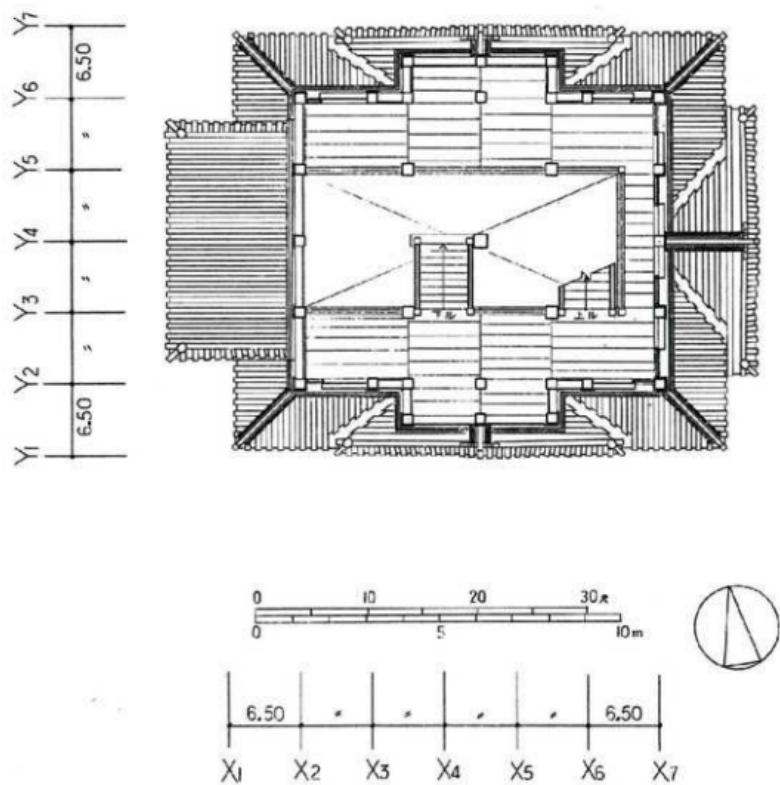
B - B' 断面図



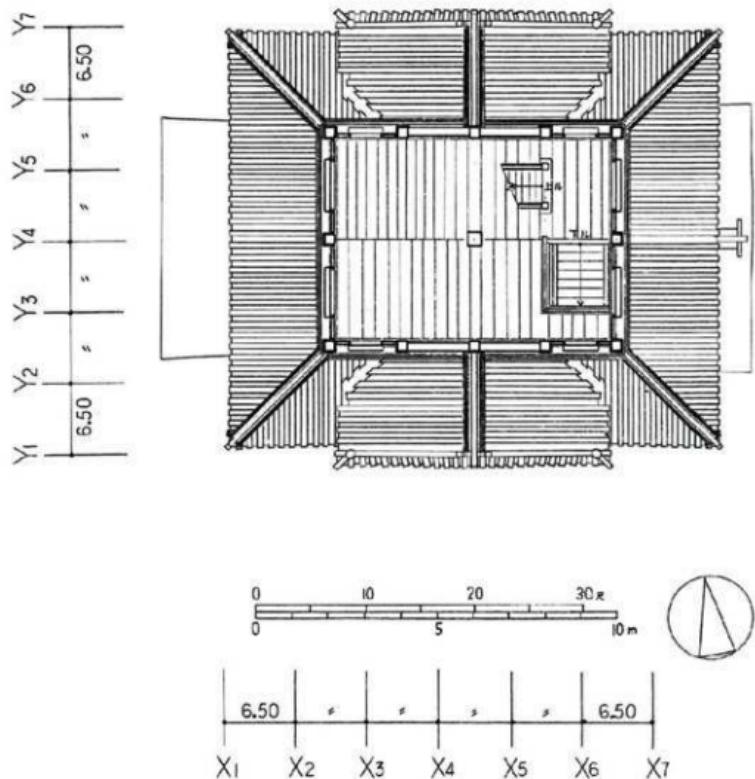
〔付図2〕 横須賀城天守台復元断面図



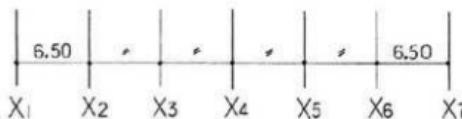
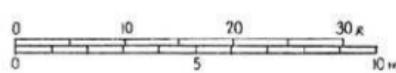
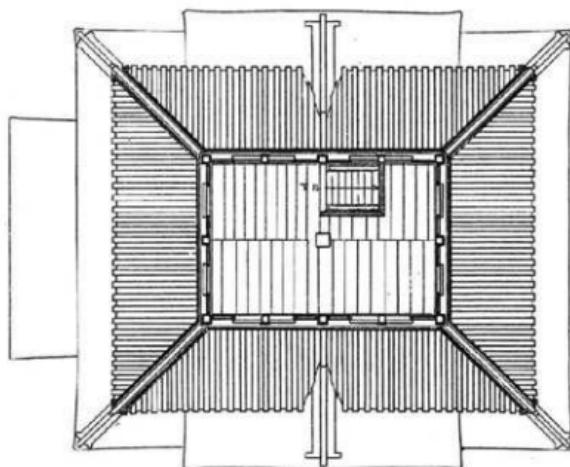
[付図 3] 横須賀城天守復元一階平面図



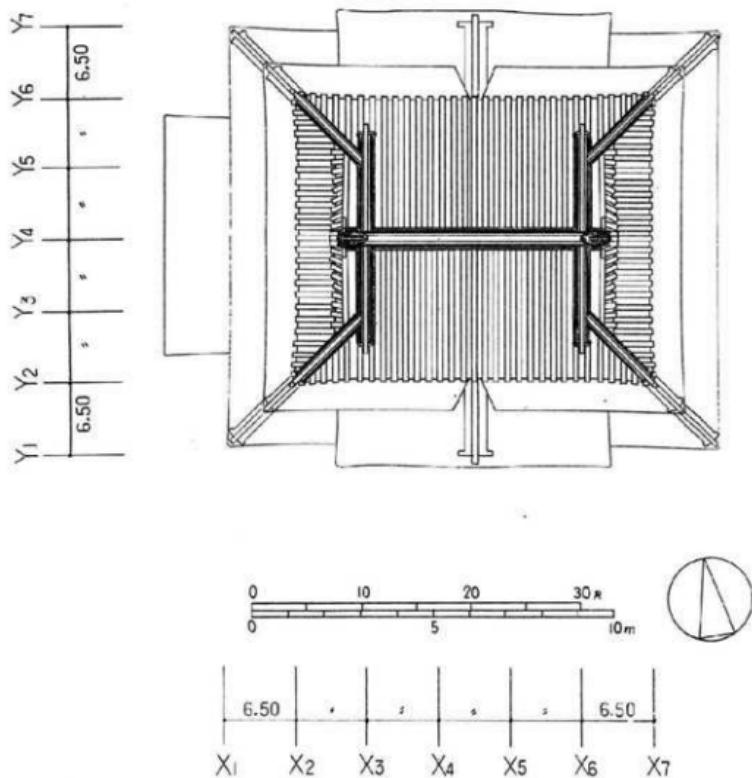
〔付図4〕 横須賀城天守復元中二階平面図



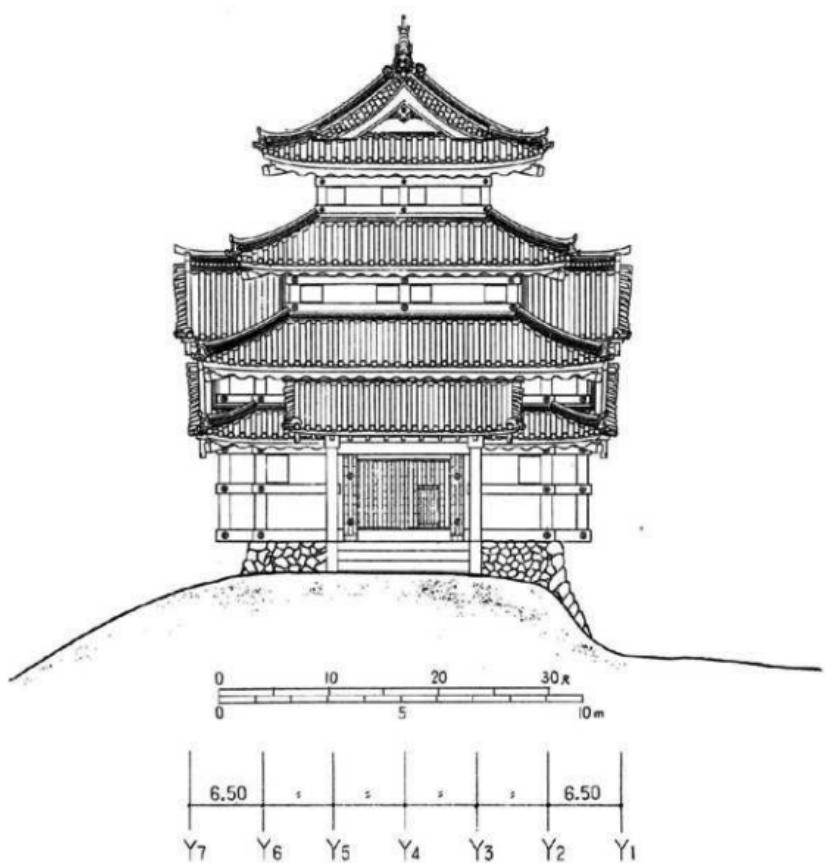
(付図 5) 横須賀城天守復元二階平面図



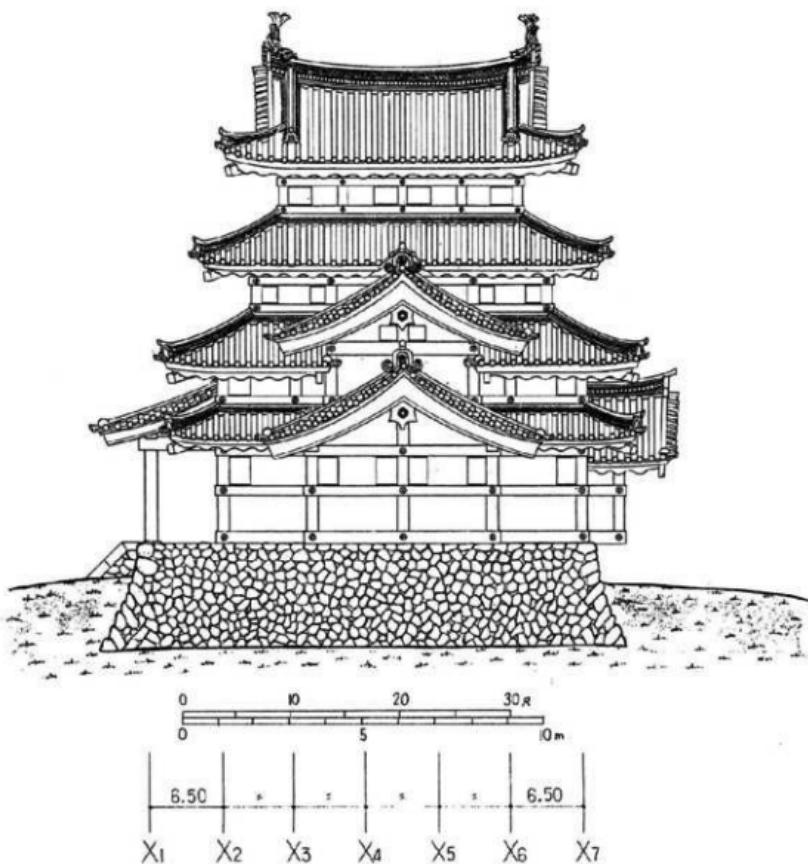
[付図 6] 横須賀城天守復元三階平面図



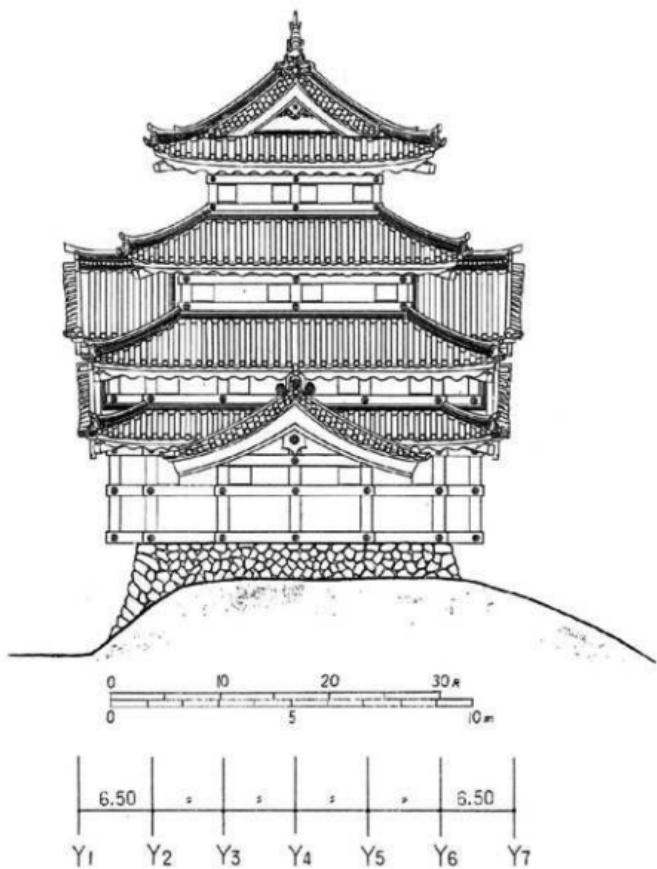
[付図 7] 横須賀城天守復元大屋根伏図



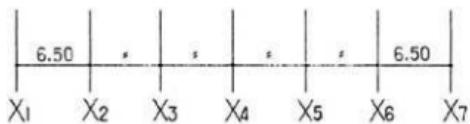
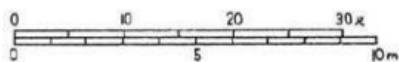
〔付図8〕 横須賀城天守復元西立面図



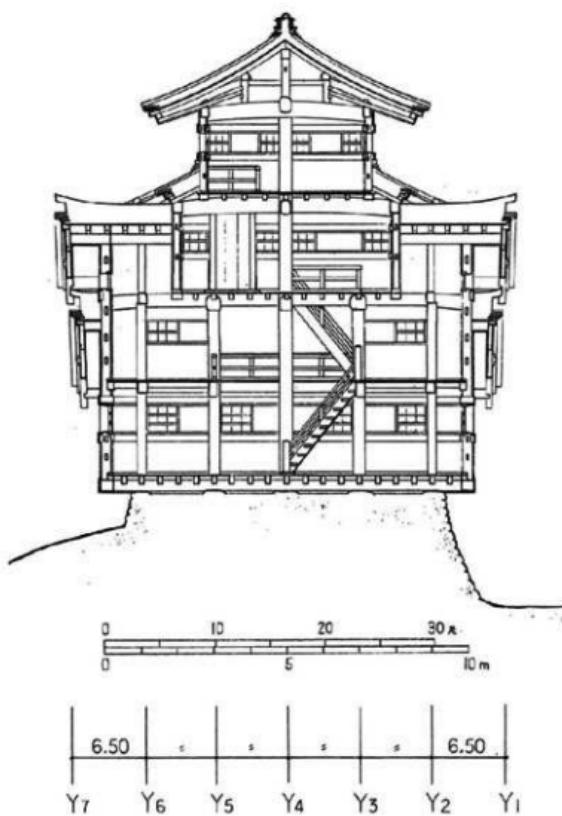
〔付図9〕 横須賀城天守復元南立面図



〔付図10〕 横須賀城天守復元東立面図

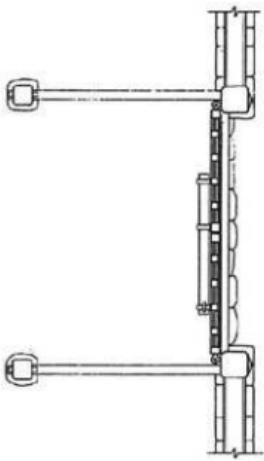
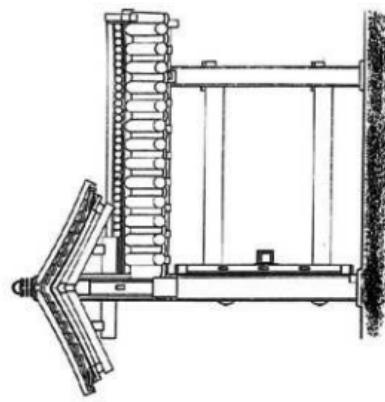


(付図11) 横須賀城天守復元東西断面図

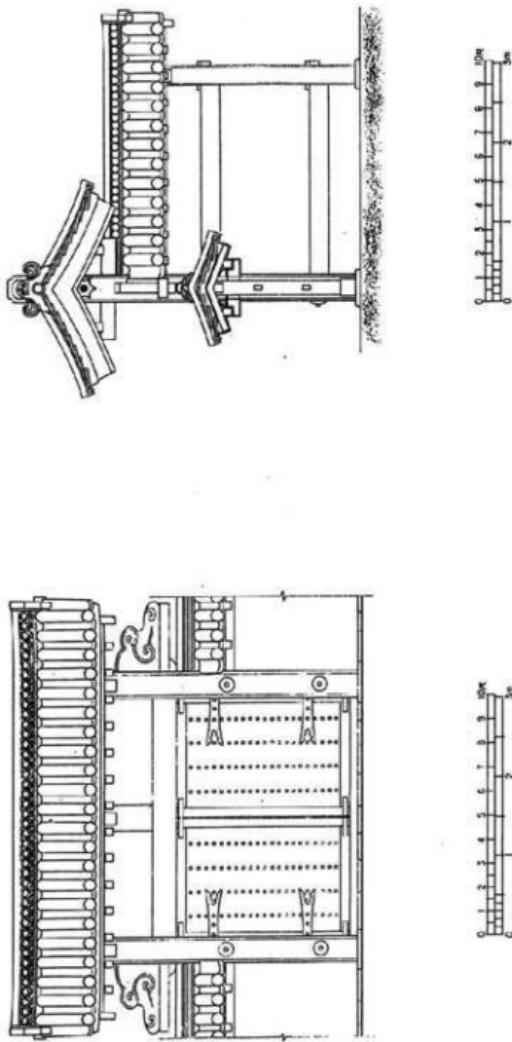


[付図12] 横須賀城天守復元南北断面図

〔付図13〕 横須賀城東大手折形萬葉門復元平面図・断面図



(付図14) 檻須賀城大手折形高麗門復元正面図・側面図



あとがき

本研究は、序論で述べたごとく、「日本史上の横須賀城」の視座にたって関係資料を集成し、単なる城郭史でなく日本建築史・都市史上の文化的価値を復元的に論考したものである。

徳川家康の江戸開府に直結先駆する横須賀城の築城は、いわば梯郭式の典型において評価され、さらに開府後の江戸時代における連郭式の増築によって、「梯郭十連郭」式の技巧的都市計画を示す。ここに幕府に直属する旗本大名家城下町の正統性を加えた点において歴史的意義は大きい。

そしてその内郭面積は、全城下町の10.7%と他城下に比べて著しく大きい。家康在世中の駿府城の13.3%に次ぐもので、如何に横須賀城の城郭としての重要度が大きいかを示す指標であろう。

その指標はまた、本丸中核で華麗にそびえる天守によって、具体的にその文化性を物語る。本丸地表(標高21.0m)よりの総高さは、54.70尺(16.58m)で、外観3層雪打(裳階)付は、4層に屋根を重ねて切妻破風を多用する。柱・長押型出の白壁仕様は、単に軍事性のみを強調する一般城郭と異って御殿風であり、その品格ある華麗な外容は横須賀城下町の歴史的文化性を体現するごとく都市の見事なランド・マークとなっている。

すでに第3次全国総合計画で、地方文化の育成興隆策がうたわれ、また新たに第4次全国総合計画で国際化社会への日本の将来像が策定されている。

そして日本の伝統文化をふまえての環境づくりが、それこそ地方レベルで着実に遂行されなければならない今日、以上に記した横須賀城天守の歴史的価値は、意味するところ大きい。

昭和51年『大須賀町都市計画マスタープラン』における「歴史と緑の町」づくりの基本施策は、大須賀城の将来像を確たる具体像で実現すべき計画がなされている。関連して昭和60年の『史跡・横須賀城跡、復元と環境整備のための基本計画』の内容を発展的にとらえて、大須賀町町づくりの中核表現

たる横須賀城天守の様式の復元的考察が要請されたわけである。本研究がその報告であるが、横須賀城天守の小規模ではあっても、華麗にして品格ある様式特質を最後に記して、結言とする。

なお、本研究は、大須賀町の御高配に加えて、国会図書館・国立公文書館内閣文庫・東京国立博物館・東北大学付属図書館狩野文庫・東京大学附属図書館・同史料編纂所・三井文庫・静嘉堂文庫・尊経閣文庫・金沢市立図書館・福井県立松平文庫・静岡県立中央図書館・西尾市立中央図書館岩瀬文庫・名古屋市立逢左文庫・京都大学附属図書館・天理図書館・岡山大学付属図書館池田家文庫・広島市立中央図書館浅野文庫・熊本大学付属図書館・島原松平文庫・撰要寺・恩高寺・松本光彦氏・阿部俊夫氏御所蔵史料を多年にわたって調査のご便宜を賜わった結果である。また直接には、前田清五郎氏・栗田有城氏・安本博氏・斎藤忠氏・小和田哲男氏・高瀬要一氏・田中哲雄氏の御研究によるところ大きい。諸機関諸先生方に衷心より御礼申し上げる。そして八景印刷株式会社伊原純司氏の格別な御助力に改めて感謝の意を表したい。

代表 内 藤 昌（名古屋工業大学教授・工博）
滝 口 克 己（東京工業大学教授・工博）
浅 井 佳 彦（文化環境計画研究所長）
岡 本 真理子（同上主任研究員・工博）
鈴 木 規 夫（同上研究員・工修）
福 永 佳 代（同上研究員）
高 野 雅 文（名古屋工業大学大学院生）
宮 本 通 成（同 上 ）
丸 石 輝 彦（同 上 ）
高 岡 秀 明（同 上 ）
山 根 正 彦（同 上 ）
山 本 春 夫（同 上 ）

横須賀城学術調査研究報告書

平成2年3月 印刷発行
発 行：大須賀町教育委員会
印 刷：八景印刷株式会社
著 作：文化環境計画研究所 ©
名古屋市東区代官町35-16
第一富士ビル
TEL：052-932-5178
FAX：052-932-5187

